

文人大名



鍋島直條の
詩箋卷

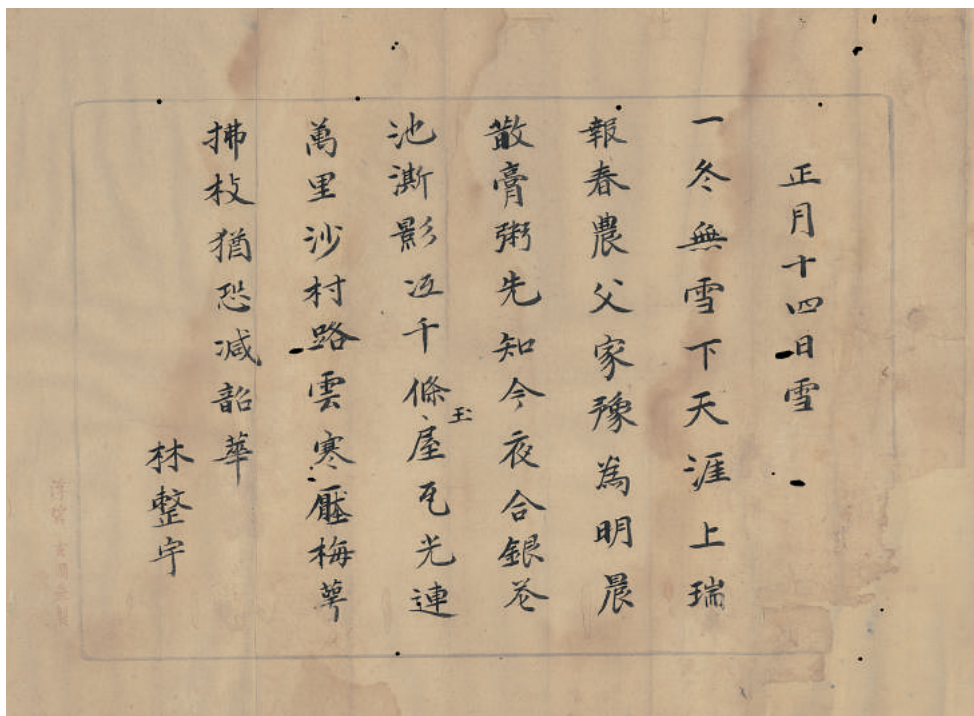
中尾友香梨
井上 敏幸



文人大名鍋島直條の詩箋卷



鹿島鍋島家旧蔵『鍋島直條詩箋卷』



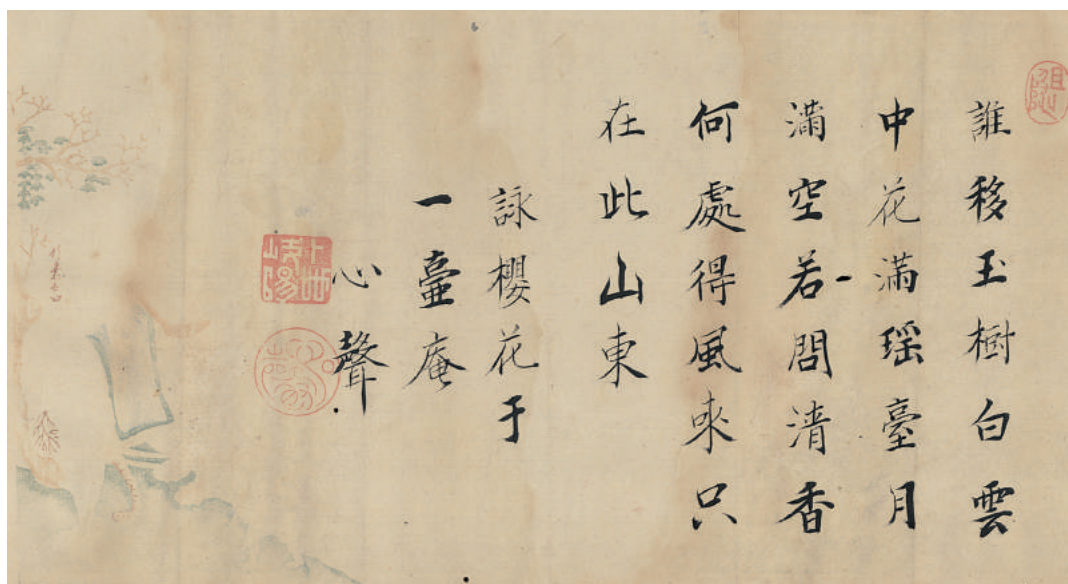
林鳳岡「正月十四日雪」

次韻
醉白翁君
重陽
點滴樓前黃
菊月三杯
泛菊小窗東
醉後小窗滿
雨雨學海棠
柔柔帶海棠
陸羽九日海棠
月海棠海棠

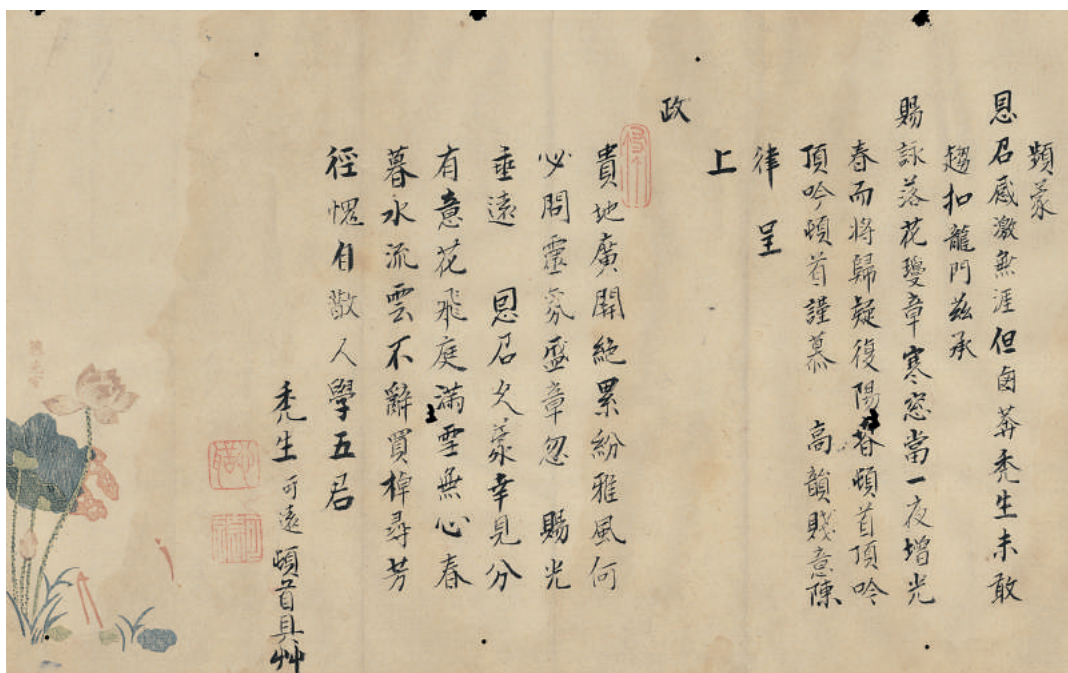
人見竹洞「次韻醉白雅君重陽」付書翰

晴白隱君 夢

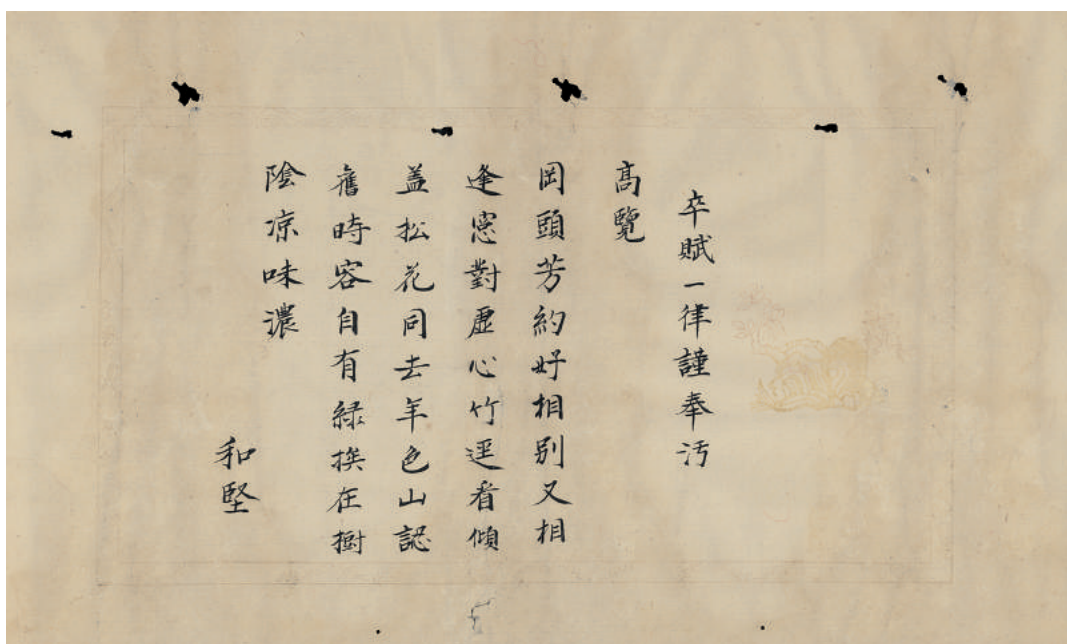
人見竹洞「次韻醉白雅君重陽」付書翰（続き）



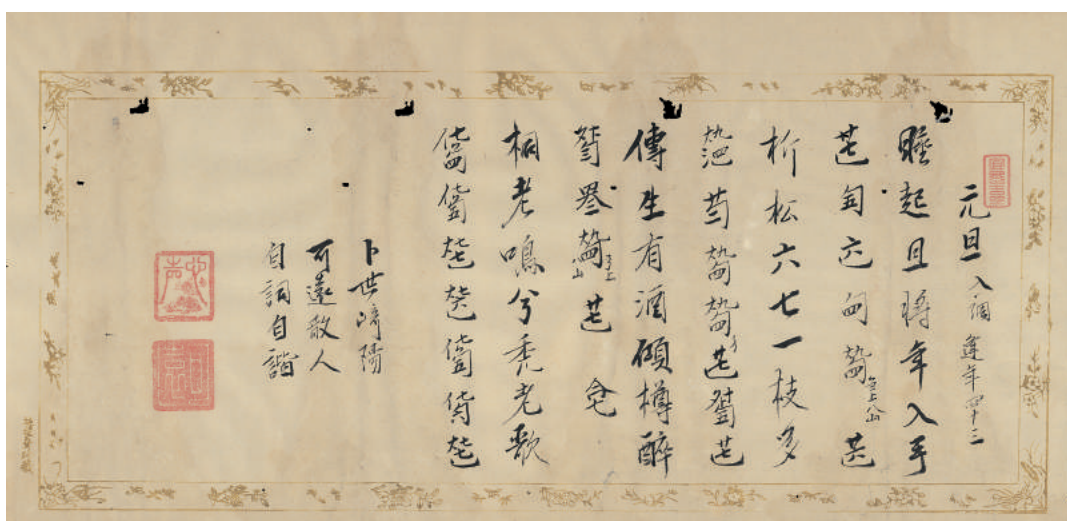
何心聲「詠櫻花于一壺庵」



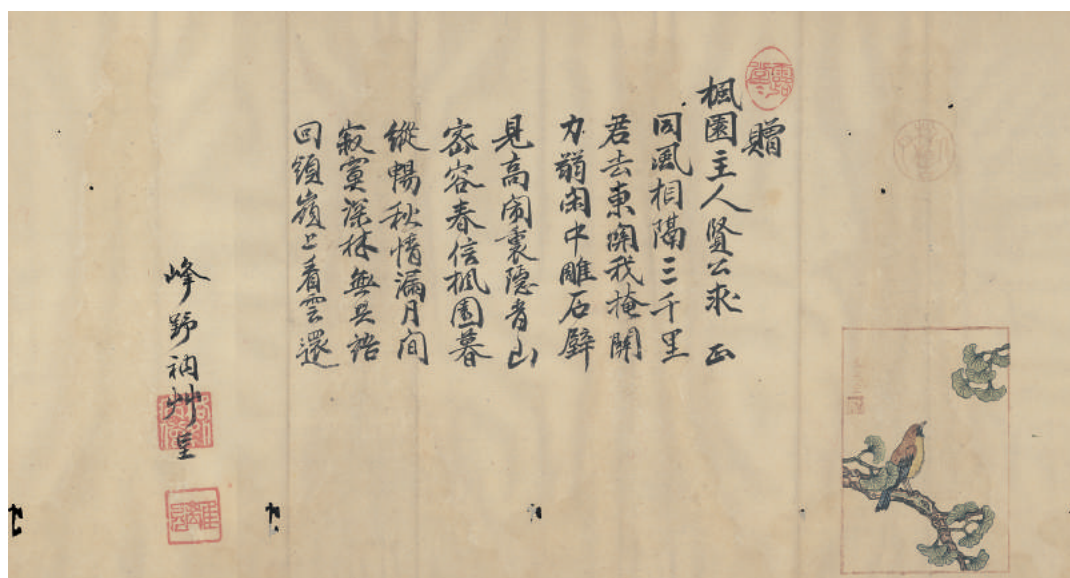
何心聲「頻蒙恩召、感激無涯。但鹵莽禿生、未敢趨扣龍門。茲承賜詠落花瓊章、寒窓當一夜增光、春而將歸、疑復陽春。頓首頂吟、頂吟頓首、謹慕高韻、賤意陳律、呈上政」



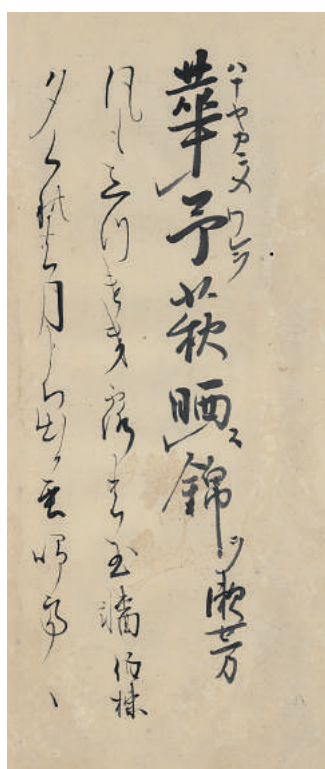
和堅「卒賦一律、謹奉汚高覽」



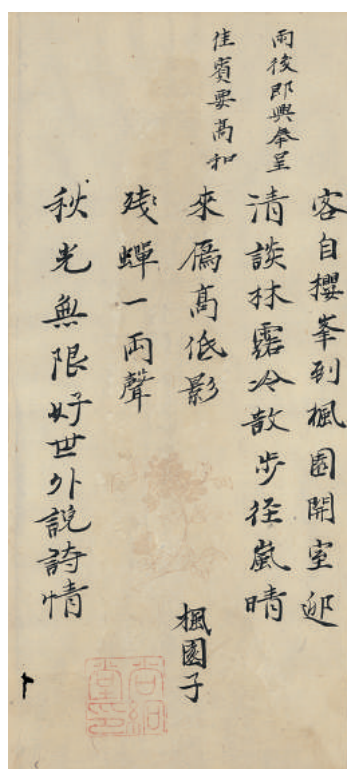
何心聲「元旦」



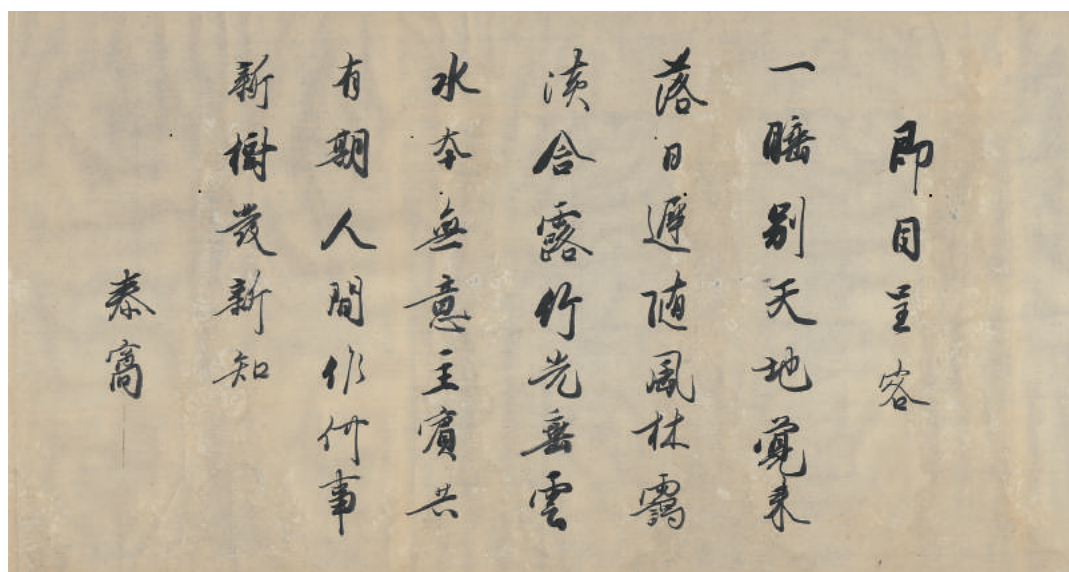
格峰実外「贈楓園主人賢公求正」



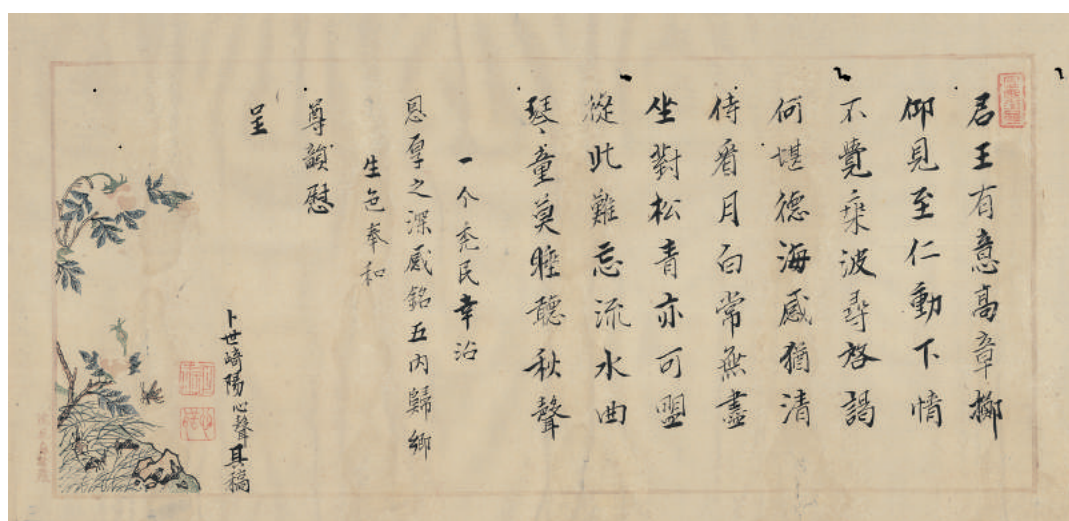
林鳳岡・鍋島直條〔漢和聯句〕



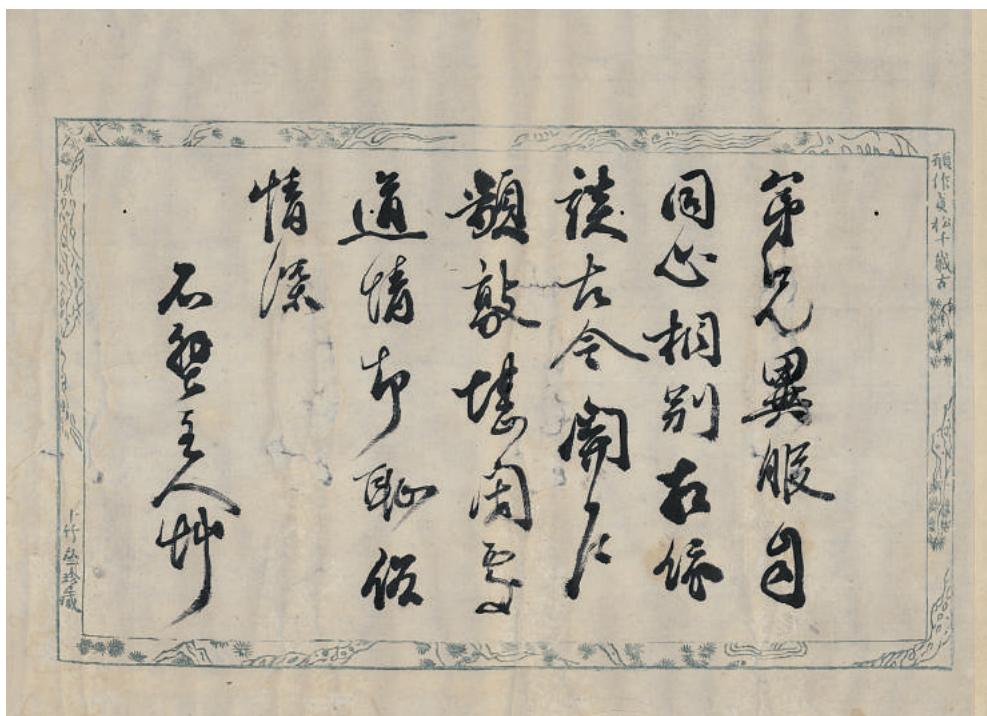
鍋島直條「雨後即興、奉呈佳賓、要高和」



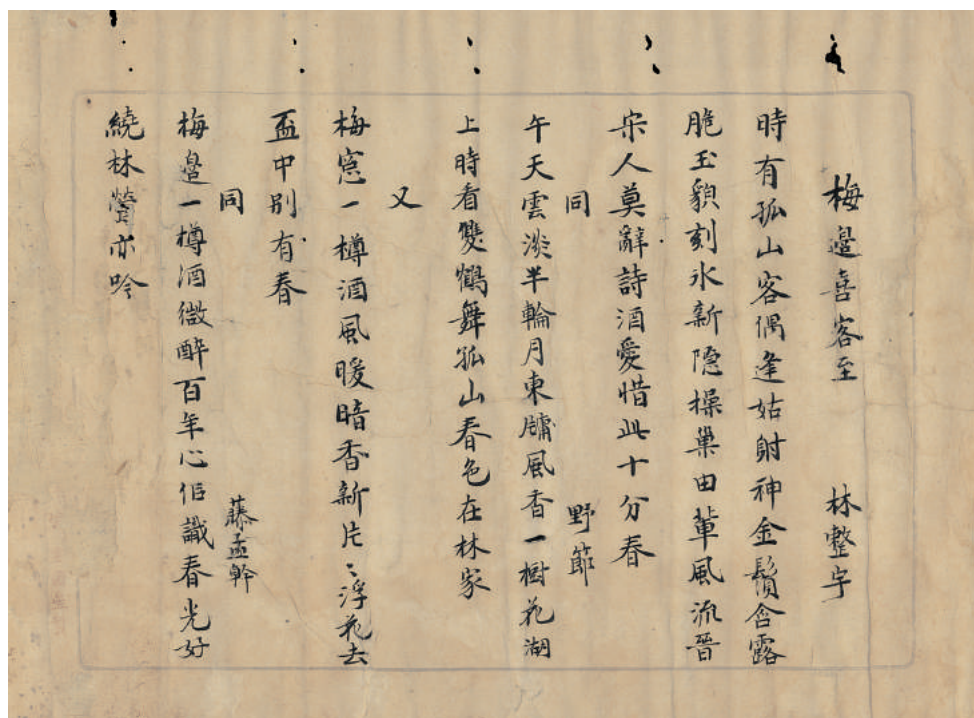
鍋島直條「即目呈客」



何心聲「一个秃民、幸治恩厚之深、感銘五內、歸鄉生色、奉和尊韻、慰呈」



格峰笑外〔無題〕



林鳳岡・人見竹洞・鍋島直條「梅邊喜客至」

目次

まえがき	中尾 友香梨	11
凡 例		15
1 林鳳岡「正月十四日雪」		17
2 何心声「詠桜花于一壺庵」		18
3 人見竹洞「次韻醉白雅君重陽」付書翰		19
4 逸民「己未元日」		21
5 何心声「頻蒙恩召、感激無涯。但鹵莽忝生、未敢趨扣 竜門。茲承賜詠落花瓊章、寒窓当一夜増光、春而將帰、 疑復陽春。頓首頂吟、頂吟頓首、謹慕高韻、賤意陳律、 呈上政」		23
6 格峰実外「和直條公見訪問韻」		25
7 假我堂人「辱賜玉詩、閣回鯉先誦、語句驚人。為謝其 賜之、重強搜枯腸、奉攀高押。只恐早々、音声不正、 一瞥抛擲是禱」		26
8 和堅「卒賦一律、謹奉汚高覧」		28
9 何心声「元旦」		29
10 和堅「雨後即景」		30
11 格峰実外「贈楓園主人賢公求正」		31
12 鍋島直條「雨後即興、奉呈佳賓、要高和」		33
13 和堅「和奉」		34
14 鍋島直條「即目呈客」		34
15 林鳳岡・鍋島直條「漢和聯句」		36
16 何心声「感近左右、奉和即席尊韻、上呈」		36
17 何心声「一个忝民、幸治恩厚之深、感銘五内、帰郷生 色、奉和尊韻、慰呈」		38
18 林鳳岡「芳和二章」		39
19 人見竹洞「おほつごもりのふみ」		40
20 格峰実外「無題」		43
21 梅嶺道雪「偈二首、奉謝嗣君右京大夫大檀越光賁敝刹、 併祝」		44
22 桂巖明幢「奉和藤伯棟居士侯韻」		45
23 林鳳岡・人見竹洞・鍋島直條「梅辺喜客至」		46
解題と書誌	井上 敏幸	50

まえがき

中尾 友香梨

本書は肥前鹿島藩第四代藩主鍋島直條由来の詩箋巻を翻刻・注釈したものである。鍋島直條は、名は初め直隆、のち直條、字は孟幹、または伯棟、通称は右京、または伊賀であり、泰窩・蒙山・楓園主人・尚綱主人・白雲主人・臥隱・益道などと号した。承応四年（一六五五）に鹿島に生まれ、宝永二年（一七〇五）に江戸で没した。父は佐賀藩初代藩主鍋島勝茂の九男で、のちに鹿島藩第三代藩主となった鍋島直朝であり、母は佐賀藩家臣鍋島高顕の娘である。

直條は近世初期の西国随一の文人大名と称すべき人物である。五十歳で没するまで四千首近くの漢詩と和歌を残したことだけを見ても、そのことは疑いようがないが、ほかに連歌、俳諧、紀行文、日記なども多数ものしており、また幕府の学問を司っていた林家の鶯峰・鳳岡父子、及びその門人で幕府の儒官となった人見竹洞を中心に、林家一門、諸藩の大名、公家歌人、連歌師、俳諧師、学僧、唐通事などさまざまな人たちと幅広く交遊し、彼らと応酬した詩文をも数多く残した。

これらの作品はいずれも上梓されることなく、ほとんどが現在なお巻物または草稿の形で福岡市博物館及び祐徳博物館に所蔵されているが、ここに紹介する『詩箋巻』は本書の執筆者の一人である井上敏幸氏（佐賀大学名誉教授）の所蔵である。氏は一九六〇年代頃よりすでに直條の草稿群に対して調査を行い、その紀行文を中心に一連の翻刻

資料と学術論文を発表してきた。まさに直條研究の草分け的存在というべきである。氏はまた直條関連資料の保存のために長年奔走し、現在、直條関連資料が比較的にとまった形で福岡市博物館と祐徳博物館に所蔵されているのも、ひとえに氏の尽力によるものである。さらに、氏は個人的にも直條関連資料の蒐集に精力的に取り組み、古書肆に出回っていた直條の巻物を数点入手されたが、その一つが本『詩箋巻』である。

本『詩箋巻』は直條とその友人たちによる漢詩、和文、漢和聯句などを一巻の卷子に仕立てたものである。直條を含めて計十名による三十一点の作品が収められている。卷子の具体的な成立時期は不明だが、収録作品は概ね直條の若い時期のものと見られる。そして作品の作り手は、直條を除けば大きく次の三つのグループに分けることができる。

- 江戸の林家一門（林鳳岡、人見竹洞、和堅、逸民）
- 地元鹿島の黄檗僧たち（梅嶺道雪、桂巖明童、格峰実外、假我堂人）
- 長崎の元唐通事（何心声）

それぞれの人物の詳細については、稿末の「解題と書誌」を参照されたいが、いずれも直條の少年時代及び青年時代の文芸修業、殊に漢詩文の修業に大きな影響を与えた人たちである。

中でも特に注目に値するのは、長崎の元唐通事何心声の作品が多く収められていることである。この人物についてはまだ解明されていない部分も多いが、近年その隠居所であった心田菴が一般公開されて注目を集めている。心田菴については、長崎に遊学して文人画を学んだ

仙台出身の菅井梅閑（一七八四～一八四四）が文化十四年（二八一七）に描いた「心田菴図」が残っており、幕末の国学者中島広足（一七九二～一八六四）も『檀園文集』（天保十年、一八三九）の中で「松蔭舎記」として心田菴を紹介している。また、心声の生きていた時代のものとしては、長崎の人での中に幕府の儒官に拔擢され、將軍吉宗の命を承けて『大清会典』の翻訳にあたった深見玄岱（二六四九～一七二二）が、長崎滞在中の天和二年（一六八二）に「心田菴記」を執筆しており、近年その自筆卷子本が発見されて話題を呼んでいる（若木太一「高玄岱自筆卷子本『心田菴記』について」、長崎歴史文化博物館『研究紀要』第七号、二〇一三年三月）。

一方、心声と直條の関係についてはこれまでまったく言及されることがなかった。したがって本『詩箋卷』に収められている、心声が直條に贈った五首の詩は注目に値する。兩人がきわめて親密な関係にあり、直條の招請によって心声が鹿島を訪れていたことが、本『詩箋卷』所収の作品から読み取れるのである。また中には、心声が寛文九年（一六六九）元旦に自作の七言絶句を七絃琴の減字譜に載せて直條に贈った作品もあり、これも注目すべきである。というのは、文人の嗜むべき「琴棋書画」の一つとされる七絃琴は、奈良時代に日本に伝来し、平安末期に一旦その奏法が途絶え、延宝五年（一六七七）に明僧東皐心越（一六三九～一六九五）が来日したことにより再び日本に流入して再興したとされるが、この資料は心越の来日以前からすでに心声が七絃琴を弾いていたことを示すと同時に、直條も心声より琴の手ほどきを受けていた可能性を示唆するからである。

そして本『詩箋卷』についても一つ注目すべき点は、収録作品の大半が詩箋に記されていることである。計二十三枚の料紙のうち十五

枚が詩箋である。本巻物を『詩箋卷』と称する所以である。詩箋とは詩の贈答または書簡のやりとり用いる便箋のことであり、「詩牋」とも書く。本巻物に収められた詩箋は、縦十四・六厘（二十三・三厘、横二十六・九厘）四十六・一厘の横長の形、または縦二十三・八厘、横十一・〇厘の縦長の形をしており、墨以外の色版を用いたさまざまな文様枠が施されていたり、箋の一隅に花鳥、草虫、花卉、岩石、白象などの絵が、多色摺り、ぼかし、空摺りなどの技法で配されていたりして、精緻で華奢なその模様は見る者を惚れぼれとさせる。

詩箋自体はかなり古くからあったようで、早いものとしては、白居易や元稹などと詩を応酬したといわれる唐代の名妓薛濤の考案による「薛濤箋」（濃い紅色の小型詩箋）が有名である。そして明代後期になって、詩箋は木版多色摺りの技術が発達したことによって普及し、文人趣味の一環として特に知識人の間で流行した。日本には近世初期に黄檗僧や文化人の渡来及び貿易船の来航によって流入し、俳諧一枚摺や浮世絵の発達に影響を与えたとされる。

現在、日本で確認された詩箋は約五百三十枚あるという（河野実「再考 小川破笠画『風のすゑ』の挿図と詩箋」、『文学』第六卷第二号、岩波書店、二〇〇五年三月）。比較的に量のまとまったものとしては、宇治の万福寺に伝わる歴代黄檗僧たちの詩箋群、水戸の祇園寺に伝わる東皐心越由来の詩箋群、島原図書館の松平文庫に蔵されている林家国史館由来の詩箋群、福岡県柳川市の古文書館に蔵されている安東省菴由来の詩箋群、そして福岡市博物館と祐徳博物館中川文庫に蔵されている鍋島直條由来の詩箋群が主であり、ほかに『おくのほそ道』途上の芭蕉と曾良が須賀川の等躬に乞われて染筆、応酬した「三子三筆」（嵐牛藏美術館蔵、倉島利仁・加藤定彦「芭蕉・曾良・等躬『三子

三筆」)、俳文学会『連歌俳諧研究』第百十四号、二〇〇八年三月を参照)、大分県の臼杵藩主稲葉侯に仕えた吉田家の文書の中の「歴代詩文十四栄賢」(国文学研究資料館蔵)、柳川市の古刹福厳寺に伝わる「開山老和尚諸方書簡」、宝暦から天明期にかけて江戸で活躍した佐賀出身の名医徳永雨卿の寿巻(佐賀大学地域学歴史文化研究センター蔵、拙稿『歴史に埋もれた名医―徳永雨卿』、佐賀大学地域学歴史文化研究センター刊行、二〇一一年を参照)などにも、一枚ないし数枚の詩箋が用いられていることが確認されている。これらの詩箋はいずれも中国から舶載されたものである。

明末の詩箋として有名なものは、呉発祥、胡正言という人物がそれぞれ南京に開いた書肆である「羅軒」と「十竹斎」――羅軒の主人を清代の翁嵩年(一六四七―一七二八、字は康貽、号は蘿軒)とする説もあるが、これは間違いである――から出されたものであり、天啓六年(一六二六)と崇禎十七年(一六四四)にはそれぞれの図柄を集めた『羅軒变古箋譜』二卷(百七十八種の詩箋図柄を収録)と『十竹斎箋譜』四卷(二百七十九種の詩箋図柄を収録)が刊行されている。本『詩箋巻』には、羅軒詩箋は含まれていないが、十竹斎詩箋が一枚収められている。ほかに浣花斎、玄圃斎の詩箋がそれぞれ三枚ずつと竹嘉斎、藤光室、麥光室の詩箋が一枚ずつ含まれており、残りは版元が明記されていないものである。このうち浣花斎は杭州にあった書肆であり、ほかは未詳であるが、おそらくいずれも明末清初に中国江南地域に存在した書肆であろう。

中野三敏氏はかつて祐徳博物館の中川文庫に蔵されている直條由来の詩箋について、「元禄以前に、すでに直条のような西国小藩の大名文人の周辺で、このような色摺りの詩箋が、しかも日用文房の具の一

つとして用いられていたという事実は、おそらくこれまでの絵画史上では、一度も報告されたことはなかったと思う。二万石でもこれなのだから、さすがにお大名なるかなの感を深くするとともに、このことは日本の版画史を考える上で、きわめて重要な問題を提供してくれているように直感したことだった」(『江戸文化評判記』、中公新書、一九九二年初版)と述べたが、その後、河野実氏が一九九九年に町田市立国際版画美術館において開催された「江戸の華 浮世絵展」の図録(同名)第二部「色版の系譜―浮世絵の源流は中国の便箋だった?」の中で、元文四年(一七三九)の絵俳書『風のすゑ』の挿絵に詩箋の影響が見えることを指摘し、さらに『江戸文学』第二十五号(ペリカン社、二〇〇二年六月)所収「小川破笠画『風のすゑ』の挿図と詩箋」と前掲「再考 小川破笠画『風のすゑ』の挿図と詩箋」の中で具体的な考証を行った。これにより日本の多色摺版画史における詩箋の影響はより確実なものとなったのである。

このように本『詩箋巻』はその内容だけでなく、芸術の面においてもきわめて高い価値を有するが、直條とその周囲の人たちが詩箋を愛用したのは、もちろんこうした芸術的価値を重んじたからというより、あくまでも文人趣味の一環であったと考えるのが妥当であろう。直條の文人趣味については、拙稿「文人大名―鍋島直條」(佐賀大学地域学創出プロジェクト編『佐賀学Ⅱ』、岩田書院、二〇一四年)があるので、あわせてご覧いただければ幸いである。

本書の執筆にあたっては、井上氏が「解題と書誌」、和文の翻刻と語釈を担当し、中尾が「まえがき」と漢詩の翻刻、書き下し、語釈を担当した。なお出版に際しては、佐賀大学地域学歴史文化研究センターの伊藤昭弘准教授及び大同印刷株式会社の小野隆氏に大変お世話

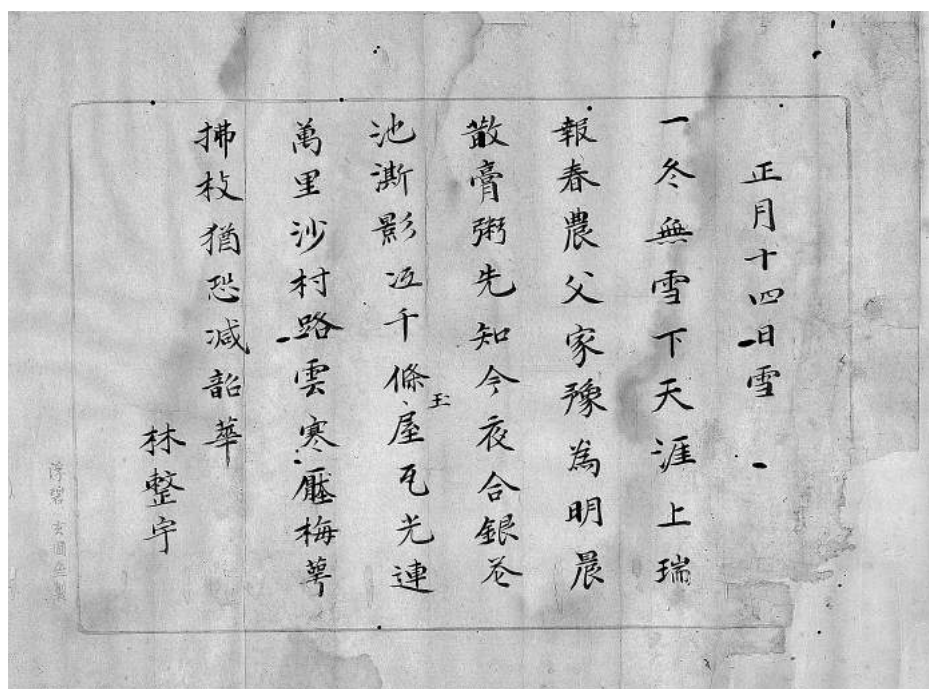
になった。心より感謝申し上げたい。

凡 例

- 一 作者名は比較的によく知られた号または字、名で記した。但し、僧名に関しては道号と法諱を並記した。
- 一 漢字は人名など特別なものを除き、原則として通行の字体を用いた。
- 一 漢詩の書き下し文は現代仮名遣いに統一し、和文の仮名遣いは原文のままにした。
- 一 漢詩の場合は行移りを無視して、句ごとに改行し、原文と書き下し文を上下に対応させ、その後に語釈を並べた。
- 一 和文の行移りは原文にしたがい、適宜句読点を加えた。
- 一 語釈は必要最小限に止めた。
- 一 判読困難な箇所は□で表した。

1 林鳳岡「正月十四日雪」

詩箋（浮碧 玄圃齋製）
縦22.0cm×横29.7cm



正月十四日雪

正月十四日の雪

一冬無雪下天涯 一冬 雪の天涯に下る無し
上瑞報春農父家 上瑞 春を報ず 農父の家
豫為明晨散膏粥 豫め明晨の為に膏粥を散ぜんとすれば
先知今夜合銀花 先に知りて 今夜 銀花を合わす
池漸影返千条玉 池漸 影返る 千条の玉
屋瓦光連万里沙 屋瓦 光連なる 万里の沙
村路雲寒庄梅萼 村路 雲寒く 梅萼を圧す
松枝猶恐減韶華 枝を払えば 猶お恐る 韶華減ずるを

林整宇

七言律詩。韻字は涯・家・花・沙・華（下平声六麻）

林羅山を開祖とし、江戸幕府の学問を司っていた林家の第三代当主
林鳳岡（一六四四―一七三三）の作。落款の「整宇」は鳳岡の別号。

『鳳岡林先生全集』巻二十に同詩が収められており、その前後の作品
の創作年代から判断すれば、該詩は延宝五年（一六七七）の作品であ
る。この時、直條は二十三歳、参勤交代で江戸にいた。

【語釈】

（1）上瑞 最も大きな吉兆。

（2）膏粥 脂を浮かべた粥。膏糜とも。古人は陰暦正月十五日

にこれを用いて蚕の神を祭った。『搜神記』巻四に次のようにある。「呉県張成夜起、忽見一婦人立於宅南角、举手招成曰、此是君家之蚕室、我即此地之神、明年正月十五、宜作白粥、泛膏於上。以後年々大得蚕。今之作膏糜像此。」また、南朝・梁の呉均『統齊諧記』にもこのことが記され、「成如言作膏粥。自此後大得蚕。今正月半作白膏粥、自此始也」とある。

(3) 銀花 銀細工の花、ここでは雪花のたとえ。

(4) 池漸 凍った池の表面。

(5) 千条玉 雪化粧した柳枝のたとえ。

(6) 韶華 春の美しい景色。

② 何心声「詠桜花于一壺庵」

詩箋（竹嘉斎）
縦14.6cm×横26.9cm

誰移玉樹白雲中^①
花滿瑤台月滿空^③
若問清香何處得^④
風來只在此山東^④

誰か玉樹を白雲中に移したる
花は瑤台に満ち 月は空に満つ
もし清香何處より得たるかと問わば
風来たりて只だ此の山東に在るのみ

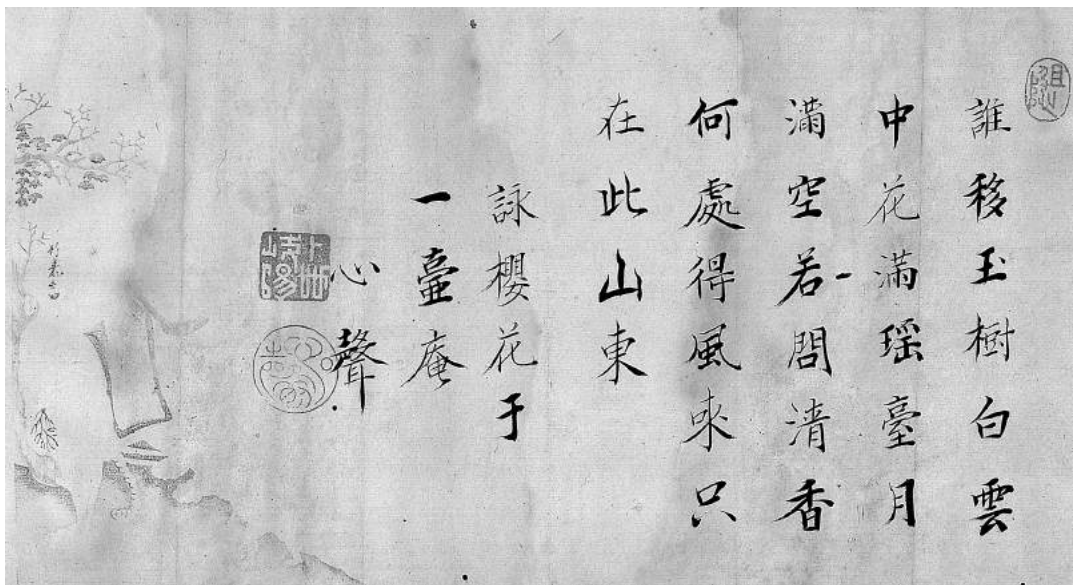
詠桜花于一壺庵

桜の花を一壺庵に詠ず

心聲

卜世崎陽

心聲



七言絶句。韻字は中・空・東（上平声一東）

長崎の元唐通事何心声^{がしんせい}（一六二七～一六八六、帰化唐人何高材の子、名は兆晋、字は可遠）の作。題の「一壺庵」は未詳。あるいは直條が延宝三年（一六七五）に蔵春谷の山麓に結んだ庵の名か。『楓園家塵』（鹿島藩第六代藩主鍋島直郷^{なおさど}がまとめた直條の草稿群、祐徳博物館中川文庫蔵）第一一八冊に、この詩に唱和した直條の次の詩が収められている。

和荷氏^マ一壺菴詠桜花韻

荷氏の「一壺菴に桜の花を詠ず」の韻に和す
九十春光一壺中 九十（三ヶ月）の春光 一壺の中
白桜爛漫裏長空 白桜 爛漫として 長空を裏む^{うらむ}
絶勝牡丹誇華域^{はなは} 絶だ勝る 牡丹の華域（中国）に誇るに
斯樹独冠若木東 斯の樹 独り 若木（日本）の東に冠たり

【語釈】

- (1) 玉樹 仙界にあるとされる樹木、または美しい樹。ここでは桜の樹をいう。
- (2) 白雲 一壺庵が山中に建てられていることを意味すると同時に、そこが隠居であることを暗示する。
- (3) 瑶台 仙人の住まう高殿。ここでは一壺庵を指す。
- (4) 只在此山東 唐・賈島の「尋隱者不遇」詩に、「松下問童子、言師採藥去、只在此山中、雲深不知処」とあるのを踏まえる。

〔3〕 人見竹洞「次韻醉白雅君重陽」付書翰

楮紙

縦15.1cm×横67.3cm

次韻醉白雅君重陽

醉白雅君の「重陽」に次韻す

点滴 ^① 檐前 ^② 黄葉風	点滴	檐前 ^{えんぜん}	黄葉の風
三杯 ^③ 泛菊小窓東	三杯	菊を泛 ^{つか} かぶ	小窓の東
醉来不覚滿城雨	酔い	来たりて	覚えず 滿城の雨
学得煎茶桑苧翁 ^④	学び得たり	茶を煎する	桑苧翁 ^{そうちよう}

〔自注〕 陸羽九日煎茶、自号桑苧翁。

陸羽、九日に茶を煎じ、自ら桑苧翁と号す。

七言絶句。韻字は風・東・翁（上平声一東）

幕府の儒官人見竹洞^{ひとみちくどう}（一六三八～一六九六）の作。直條の「重陽」詩に次韻した唱和詩。題の「醉白雅君」は直條の別号。しとしと秋雨の降る重陽の日に、唐の茶聖、陸羽に倣って、酒の代わりに茶に菊の花を浮かべ、その香りに酔いしれる雅趣を詠む。『人見竹洞詩文集』（影印、人見捨蔵、一九九九年）に該詩は収められていない。

【語釈】

- (1) 点滴 雨のしずくがしたたり落ちること、またはその音を形

次韻

醉白先生

重陽

點滴餘黃

風三杯

清菊小室

解事人

陳雨堂詩

桑桑

陽明先生全集卷之四

二

五言古詩
長安道中

陳曉明

今、此の如く

肉子

三

मन्त्रालय

二、三、四、五、六、七、八、九、十、十一、十二、十三、十四、十五、十六、十七、十八、十九、二十、二十一、二十二、二十三、二十四、二十五、二十六、二十七、二十八、二十九、三十、三十一、三十二、三十三、三十四、三十五、三十六、三十七、三十八、三十九、四十、四十一、四十二、四十三、四十四、四十五、四十六、四十七、四十八、四十九、五十、五十一、五十二、五十三、五十四、五十五、五十六、五十七、五十八、五十九、六十、六十一、六十二、六十三、六十四、六十五、六十六、六十七、六十八、六十九、七十、七十一、七十二、七十三、七十四、七十五、七十六、七十七、七十八、七十九、八十、八十一、八十二、八十三、八十四、八十五、八十六、八十七、八十八、八十九、九十、九十一、九十二、九十三、九十四、九十五、九十六、九十七、九十八、九十九、一百。

三ノ目

2
 3
 4
 5
 6
 7
 8
 9
 10
 11
 12
 13
 14
 15
 16
 17
 18
 19
 20
 21
 22
 23
 24
 25
 26
 27
 28
 29
 30
 31
 32
 33
 34
 35
 36
 37
 38
 39
 40
 41
 42
 43
 44
 45
 46
 47
 48
 49
 50
 51
 52
 53
 54
 55
 56
 57
 58
 59
 60
 61
 62
 63
 64
 65
 66
 67
 68
 69
 70
 71
 72
 73
 74
 75
 76
 77
 78
 79
 80
 81
 82
 83
 84
 85
 86
 87
 88
 89
 90
 91
 92
 93
 94
 95
 96
 97
 98
 99
 100
 101
 102
 103
 104
 105
 106
 107
 108
 109
 110
 111
 112
 113
 114
 115
 116
 117
 118
 119
 120
 121
 122
 123
 124
 125
 126
 127
 128
 129
 130
 131
 132
 133
 134
 135
 136
 137
 138
 139
 140
 141
 142
 143
 144
 145
 146
 147
 148
 149
 150
 151
 152
 153
 154
 155
 156
 157
 158
 159
 160
 161
 162
 163
 164
 165
 166
 167
 168
 169
 170
 171
 172
 173
 174
 175
 176
 177
 178
 179
 180
 181
 182
 183
 184
 185
 186
 187
 188
 189
 190
 191
 192
 193
 194
 195
 196
 197
 198
 199
 200
 201
 202
 203
 204
 205
 206
 207
 208
 209
 210
 211
 212
 213
 214
 215
 216
 217
 218
 219
 220
 221
 222
 223
 224
 225
 226
 227
 228
 229
 230
 231
 232
 233
 234
 235
 236
 237
 238
 239
 240
 241
 242
 243
 244
 245
 246
 247
 248
 249
 250
 251
 252
 253
 254
 255
 256
 257
 258
 259
 260
 261
 262
 263
 264
 265
 266
 267
 268
 269
 270
 271
 272
 273
 274
 275
 276
 277
 278
 279
 280
 281
 282
 283
 284
 285
 286
 287
 288
 289
 290
 291
 292
 293
 294
 295
 296
 297
 298
 299
 300
 301
 302
 303
 304
 305
 306
 307
 308
 309
 310
 311
 312
 313
 314
 315
 316
 317
 318
 319
 320
 321
 322
 323
 324
 325
 326
 327
 328
 329
 330
 331
 332
 333
 334
 335
 336
 337
 338
 339
 340
 341
 342
 343
 344
 345
 346
 347
 348
 349
 350
 351
 352
 353
 354
 355
 356
 357
 358
 359
 360
 361
 362
 363
 364
 365
 366
 367
 368
 369
 370
 371
 372
 373
 374
 375
 376
 377
 378
 379
 380
 381
 382
 383
 384
 385
 386
 387
 388
 389
 390
 391
 392
 393
 394
 395
 396
 397
 398
 399
 400
 401
 402
 403
 404
 405
 406
 407
 408
 409
 410
 411
 412
 413
 414
 415
 416
 417
 418
 419
 420
 421
 422
 423
 424
 425
 426
 427
 428
 429
 430
 431
 432
 433
 434
 435
 436
 437
 438
 439
 440
 441
 442
 443
 444
 445
 446
 447
 448
 449
 450
 451
 452
 453
 454
 455
 456
 457
 458
 459
 460
 461
 462
 463
 464
 465
 466
 467
 468
 469
 470
 471
 472
 473
 474
 475
 476
 477
 478
 479
 480
 481
 482
 483
 484
 485
 486
 487
 488
 489
 490
 491
 492
 493
 494
 495
 496
 497
 498
 499
 500
 501
 502
 503
 504
 505
 506
 507
 508
 509
 510
 511
 512
 513
 514
 515
 516
 517
 518
 519
 520
 521
 522
 523
 524
 525
 526

善之

子
子
子

二、三、四、五、六、七、八、九、十、十一、十二、十三、十四、十五、十六、十七、十八、十九、二十、二十一、二十二、二十三、二十四、二十五、二十六、二十七、二十八、二十九、三十、三十一、三十二、三十三、三十四、三十五、三十六、三十七、三十八、三十九、四十、四十一、四十二、四十三、四十四、四十五、四十六、四十七、四十八、四十九、五十、五十一、五十二、五十三、五十四、五十五、五十六、五十七、五十八、五十九、六十、六十一、六十二、六十三、六十四、六十五、六十六、六十七、六十八、六十九、七十、七十一、七十二、七十三、七十四、七十五、七十六、七十七、七十八、七十九、八十、八十一、八十二、八十三、八十四、八十五、八十六、八十七、八十八、八十九、九十、九十一、九十二、九十三、九十四、九十五、九十六、九十七、九十八、九十九、一百。

沙路の如く

卷之四

倚歌一着

少保分元得年圖

三ノ

[illegible]

三

卷之四

五

容する言葉。

(2) 黄葉 黄葉菊(菊の種類)。

(3) 泛菊 陰曆九月九日の重陽の日には、菊の花を酒に浮かべて飲むのが慣例であるが、ここでは酒の代わりに茶に菊の花を浮かべて飲むことをいう。唐・皎然の「九日与陸処士羽飲茶」詩に、「九日山僧院、東籬菊也黄、俗人多泛酒、誰解助茶香」とあるのを踏まえる。

(4) 桑芋翁 唐の茶聖、陸羽の別号。

〔付書翰〕

可笑々々、ねなから菊をおもしろく存候。

今日ハ、めてたく登

城、隙明すくに罷帰。

自分も以手状申上候キ。

今日ハ、成程閑人二成申候。

茶を煎し、独

自がふくとたへ申候。

漸夕炊二も成申候。三・

二盃ハと存候。御佳

作、おもしろく存候。

饗侍之由うそく。

久々不得貴意、御ゆ

かしく候。

倭咏一首と存候へ共、

出来申さず候。

御城より罷帰、午睡

故、おひたしく御使

またせ申、右御用

被仰下候故、御使二御太

義二と、うそを申も

恥かし。

九日

酔白隠君 葛民

落款の「酔白隠君」と「葛民」はいずれも竹洞の別号。直條から「佳作」(和歌か)をもらい、返歌をしようと思ったが出来なかったことをふざけながら詫びた手紙。城から戻ってくつろいでいる様子が目に浮かぶ。

4 逸民「己未元日」

鳥の子紙

縦15.0cm×横24.8cm

己未元日

己未の元日

万戸松筠相掩映^{①②}

万戸の松筠^{しょういん}相い掩映^{えんえい}す

広街一望眼先青^③

広街一望^め眼先に青し

己未元日

萬戸松筠相掩映
廣街一望眼光青
風雲自有太平象
花木何非至治馨
草面陽和應是酒
洗心道術不如經
人間清福吾知足
只遇新年祝壽寧

逸民草

風雲自有太平象 風雲 自ら太平の象有り
花木何非至治馨 花木 何ぞ至治の馨に非ざらん
革面陽和應是酒 革面の陽和 應に是れ酒なるべし
洗心道術不如經 洗心の道術 經に如かず
人間清福吾知足 人間の清福 吾れ足るを知る
只遇新年祝壽寧 只だ新年に遇い 壽寧を祝ぐ

逸民 草

七言律詩。韻字は映・青・馨・經・寧（下平声九青）

林家の門人岡井碧庵（一六二六―一六九八、名は泰、字は定叟、別号に東皐、逸民など、のちに讃岐高松藩に仕えた）の作。題の「己未」は延宝七年（一六七九）。林家の元日の詩会での作品か。青々とした松と竹の門松が家々に飾られ、めでたい雰囲気にも包まれた元日の江戸の街の描写を通して、太平の世を称える内容。この時、直條は二十五歳、参勤交代で江戸にいた。

【語釈】

（1）松筠 松と竹。

（2）掩映 遮られたり現れたりすること。唐・白居易の「新昌新居書事四十韻、因寄元郎中張博士」詩に、「籬東花掩映、窓北竹嬋娟」とある。

（3）広街 広い街。ここでは江戸の街を指す。

頻蒙

恩召感激無涯但鹵莽先生未敢

趨扣龍門茲承

賜詠落花瓊章寒窓當一夜增光

春而將歸疑復陽春頓首頂吟

頂吟頓首謹慕高韻賤意陳

律呈

上

政

貴地廣闊絕累紛雅風何

必周靈氛盛章忽賜光

垂遠恩召久蒙幸見分

有意花飛庭滿雪無心春

暮水流雲不辭買棹尋芳

徑愧自敬人學五君

先生可遠頓首具艸



(4) 至治馨 教化が行きわたって安定繁栄している太平の世を称

える言葉。『尚書』周書・君陳の「至治馨香、感于神明。黍稷非馨、

明德惟馨」に由来。

(5) 革面 顔色や態度を変えること。

(6) 陽和 穏やかなさま。また、そのような雰囲気。

(7) 洗心 心の汚れや雑念を除く。

(8) 道術 学術、学説。

(9) 經 儒教の經典。

(10) 清福 穏やかでいられる幸福。

5

何心声「頻蒙恩召、感激無涯。但鹵莽先生、未敢

趨扣龍門。茲承賜詠落花瓊章、寒窓當一夜增光、

春而將歸、疑復陽春。頓首頂吟、頂吟頓首、謹慕

高韻、賤意陳律、呈上政」

詩箋(藤光室)

縦19.4cm×横31.1cm

頻蒙恩召^①、感激無涯。但鹵莽先生^②、未敢趨扣龍門^③。茲承賜詠

落花瓊章^④、寒窓當一夜增光、春而將歸^⑤、疑復陽春。頓首頂吟^⑥、

頂吟頓首、謹慕高韻、賤意陳律、呈上政^⑩。

頻りに恩召を蒙れば、感激すること涯り無し。但だ鹵莽

の先生、未だ敢えて趨きて龍門を叩かず。茲に落花を詠

む瓊章を賜わるを承くれば、寒窓当に一夜にして光を増

すべし、春將に帰らんとするも、疑うらくは復た陽春な

らん。頓首して頂吟し、頂吟して頓首し、謹みて高韻を慕い、賤意もて律を陳べ、呈上して政さんことをこう

貴地^①広開絶累紛^②
雅風何必問靈氛^③
盛章忽賜光垂遠^④
恩召久蒙幸見分^⑤
有意花飛庭滿雪^⑥
無心春暮水流雲^⑦
不辭買棹尋芳徑^⑧
愧自散人學五君^⑨

貴地（鹿島） 広く開けて累紛を絶ち
雅風 何ぞ必ずしも靈氛に問わん
盛章 忽ち賜わり 光垂るること遠く
恩召 久しく蒙り 幸分かたる
有意の花は飛び 庭に雪（落花） 満ち
無心の春は暮れ 水に雲流る
棹を買いて芳徑を尋ぬるを辞さず
自ら散人にして五君に学ぶを愧はず

禿生可遠 頓首具草

心聲

可遠

七言律詩。韻字は紛・氛・分・雲・君（上平声十二文）

何心聲（作品②の解説を参照）の作。題が示すように、直條は幾度となく心聲を鹿島の自邸に招こうとしたが、勇氣がなく躊躇する心聲のもとに、直條から落花の詩が届けられ、心聲はこれに次韻して該詩を送ったと見られる。

【語釈】

（1） 恩召 「恩詔」に同じ。位の高い人が呼び寄せて召見する意。

（2） 鹵莽 「魯莽」に同じ。大雑把でいいかげんなさま。

（3） 禿生 頭のげた人、または僧を貶めていう言葉。ここでは無冠つまり無位無官の己に対する自嘲。

（4） 竜門 人望の高い優れた人物、またはその邸宅。ここでは直條の邸宅を指す。

（5） 瓊章 他人の詩文に対する美称。

（6） 寒窓 孤独な読書生活または貧しい暮らしのたとえ。ここでは自分の居所に対する謙称。

（7） 春而將帰 春が過ぎ去ろうとしていること。春が過ぎ去ることを「春帰」という。

（8） 頂吟 恭しく吟ずること。

（9） 陳律 律詩を詠む意。

（10） 呈上政 「呈政」「呈正」とも。自分の作品を献上して批正を請う言葉。「政」は「正」に通ず。

（11） 累紛 「累」は憂い、わずらい。「紛」はもめごと、争い。

（12） 靈氛 中国古代の占い師。

（13） 盛章 すぐれて美しい詩文。「瓊章」と同じく他人の詩文に対する美称。

（14） 買棹 舟を雇う意。「買權」とも。

（15） 芳徑 花径。芳しい花々が咲きほこる小径。

（16） 散人 役に立たない人間、または自由気ままな世捨て人。ここでは自分に対する謙称。

（17） 五君 中国魏晋時代の名士である阮籍、嵇康、劉伶、向秀、阮咸の五人を指す。南朝・宋の顔延之が永嘉の太守に左遷され、憤激して作った「五君詠」（『文選』所収）に由来。「竹林七賢」のう

ち山濤と王戎が含まれないのは、兩人ともに顯官となり高位に上つたからである。

〔6〕 格峰実外「和直條公見訪閑韻」

鳥の子紙
縦20.0cm×横31.4cm

和直條公見訪閑韻^①

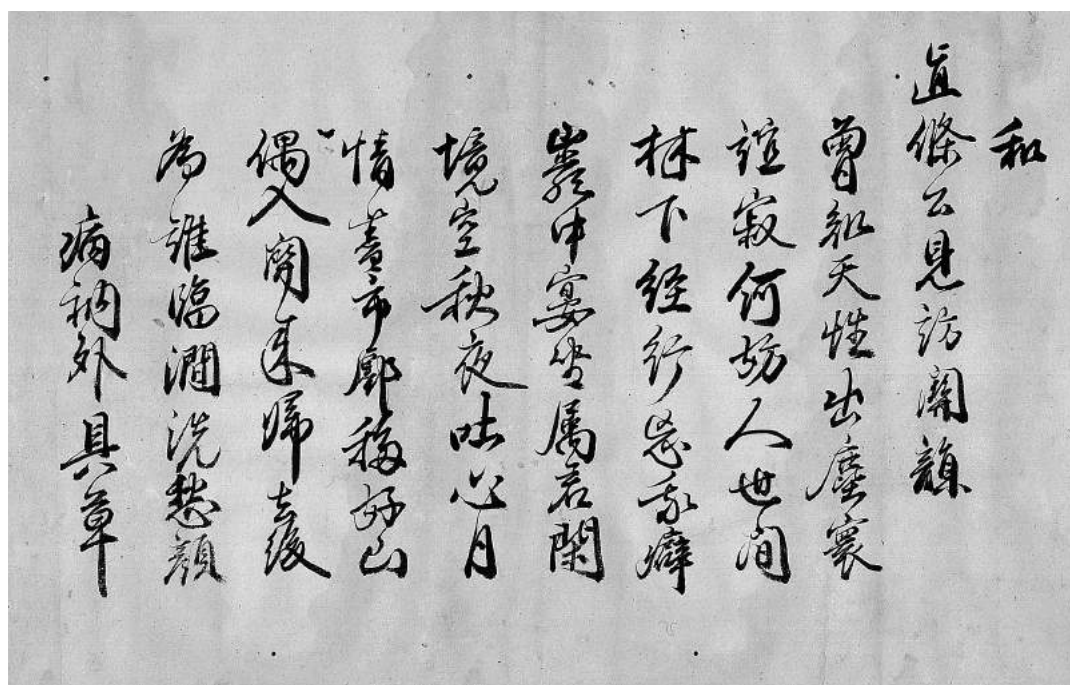
直條公の閑を訪るるの韻に和す

曾知天性出塵寰^② 曾て知る 天性 塵寰より出づるを
誼寂何妨人世間^③ 寂を誼とすれば 何ぞ妨げん 人世間
林下径行忘我癖^④ 林下 径行 我を忘るる癖
巖中宴坐属君閑 巖中 宴坐 君に属する閑
境空秋夜吐心月^⑤ 境は秋夜に空しく 心月を吐き
情盡市廓移好山^⑦ 情は市廓を蓋いて 好山に移る
偶入閑来帰去後 偶たま閑に入り来たりて帰り去りし後
為誰臨澗洗愁顔 誰が為に澗に臨みて愁顔を洗わん

病衲外 具草

七言律詩。韻字は寰・間・閑・山・顔（上平声十五刪）

直條の兄、格峰実外（一六五二～一七一五、俗名は直孝、別号は断



橋)の作品。病弱であったため、黄檗宗に帰依し、嗣子の位を弟の直條に譲って、後に出家した。落款の「病衲」は「病僧」の意。「外」は「実外」の略。「高岳断橋和尚年譜」(峰松正輝編『鹿島史料集』上巻、二〇一〇年)正徳五年(一七一五)の条に、「師六十四歳、歳旦偈に云ふ、病衲今朝六十四、骨灰未だ納ざるに還て死に同じ(以下略)」とあることから、格峰が自らを「病衲」と自嘲していたことがわかる。

題が示すように、該詩は藩主となった直條が格峰の修行の石室を訪れて詠んだ詩に対する格峰の唱和作である。

【語釈】

(1) 関 僧や尼が外界と隔絶し、静座して修行するために居住する石室または房。

(2) 塵寰 「塵界」「塵境」に同じ。俗世間をいう。

(3) 誼寂 「誼」は「義」と同じく、道理になつていと認め、正義であると称えること。「寂」は仏教の寂滅常静の道。したがって「誼寂」は直條が仏教(黄檗宗)に心を傾けていたことを示す。

(4) 徑行 自由気ままに歩くこと。

(5) 境 仏教において認識の対象となる世界。

(6) 心月 仏教用語。満月のように明るく曇りのない心。「菩提心論」の「照見本心、湛然清浄、猶如満月、光遍虚空、無所分別」に由来する言葉。

(7) 市廓 「市郭」とも。「城郭」「市井」に同じ。

7

假我堂人「辱賜玉詩、閣回鯉先誦、語句驚人。為謝其賜之、重強搜枯腸、奉攀高押。只恐早々、音声不正、一瞥拋擲是禱」

楮紙

縦20.0cm×横30.8cm

辱賜玉詩、閣回鯉^①先誦、語句驚人。為謝其賜之、重強搜枯腸^②、奉攀^{③④}高押。只恐早々^⑤、音声不正^⑥、一瞥拋擲是禱
辱なくも玉詩を賜わり、回鯉を閣きて先に誦すれば、語句、人を驚かす。其の之れを賜わるを謝するが為に、重ねて強いて枯腸を搜し、高押に奉攀す。只だ早々にして、音声の正しからざるを恐るれば、一瞥して拋擲せんことを是れ禱る

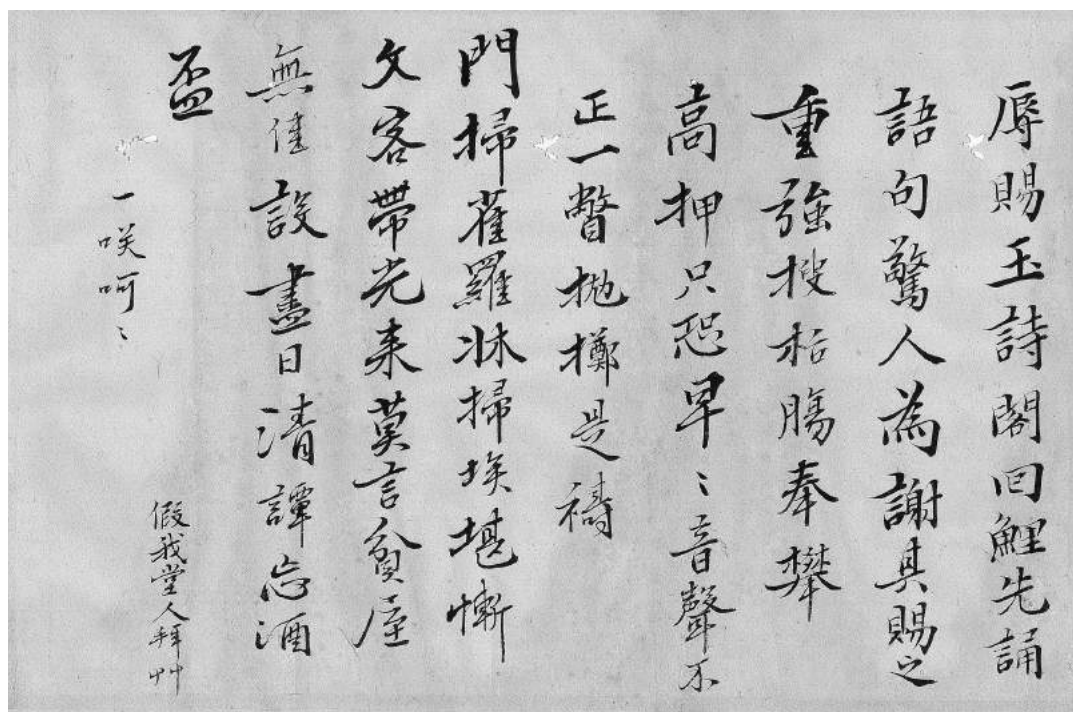
門掃雀羅 ^⑦ 牀掃埃	門に雀羅を掃き	牀に埃を掃く
堪慚文客帶光來	慚ずるに堪う	文客 光を帯びて來たるに
莫言貧屋無佳設 ^⑧	言つ莫かれ	貧屋 佳設無しと
昼日清譚忘酒杯	昼日の清譚	酒杯を忘る

假我堂人 拜草

一咲呵々

七言絶句。韻字は埃・來・杯(上平声十灰)

作者の假我堂人は未詳だが、「假我」は肉体と精神とから成るいわ



辱賜玉詩閣回鯉先誦
語句驚人為謝其賜之

重強搜枯腸奉攀

高押只恐早々音聲不

正一瞥拋擲是禱

門掃雀羅牀掃埃地慚

文客帶光來莫言貧屋

無佳設盡日清譚忘酒

盃

一咲呵々

假我堂人拜

ゆる人間をいう仏教用語。仏教では絶対不變の「我」つまり「実我」を排斥するので、なお、自分を指すのに単に「我」といわず、「假我」または「俗我」という。落款の後の「一咲呵々」は「呵々大笑」と同じく禪の悟りを表す言葉。したがって作者の「假我堂人」は禪僧であることがわかる。

【語釈】

(1) 回鯉 「鯉」は書簡。鯉の腹中から絹布に書かれた手紙が出てきたという故事に由来。したがって「回鯉」は返信。

(2) 搜枯腸 類似の慣用語に「搜索枯腸」があり、力を尽くして思索することを形容する。「枯腸」は枯れかけた文才のたとえ。ここでは贈られた詩に文才を絞って返答の詩を作ることを自虐的に表現している。唐・盧仝の「走筆謝孟諫議寄新茶」詩に、「三碗搜枯腸、唯有文字五千卷」とある。

(3) 奉攀 相手の詩に次韻することを示す謙譲語。

(4) 高押 「高」は相手にかかわる事柄につける尊敬語。「押」は押韻の意。

(5) 早々 「草々」に同じ。

(6) 音声不正 韻字や平仄が正しくないことをいう。

(7) 雀羅 雀を捕える網、かすみ網。訪問客が少なく、家の前に雀を捕える網がかけられるほど閑散としていることを、「門前雀羅」という。該詩では「門に雀羅を掃く」と「牀に埃を掃く」という表現を併せて、世捨て人の恬淡とした生活ぶりを示す。

(8) 牀 「床」に同じ。人が寝たり腰かけたりできる器具。寝台。腰かけ。

(9) 佳設 (ご)馳走。

(10) 清譚 「清談」に同じ。世俗を離れた風雅な話。

〔8〕和堅「卒賦一律、謹奉汚高覽」

詩箋
縦19.9cm×横33.1cm

卒賦一律、謹奉汚高覽^①

卒^にかに一律を賦し、謹みて高覽^{ほうお}を奉汚す

岡頭^②芳約^③好 岡頭^{こうとう} 芳約^{ほうやく}好し

相別又相逢 相い別れ 又た相い逢う

窓対虚心竹 窓に對す 虚心の竹

径看傾蓋松 径^{こう}に看る 傾蓋^{けいがい}の松

花同去年色 花は同じ 去年の色

山認旧時容 山に認む 旧時の容

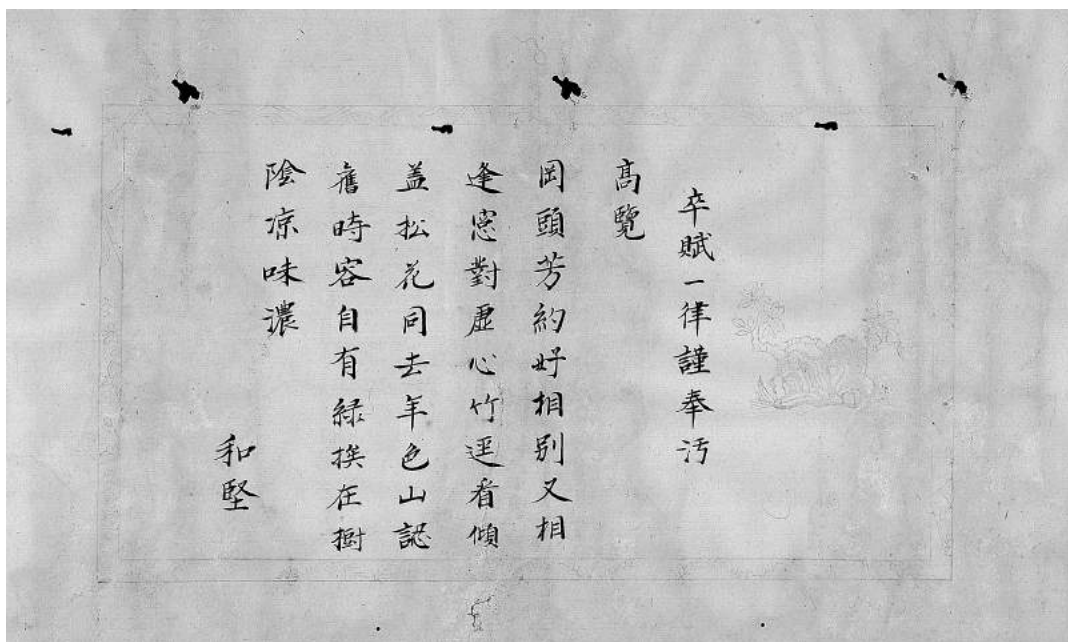
自有緑挨在 自^{おのずか}ら緑の挨^{あい}在^{ざい}する有れば

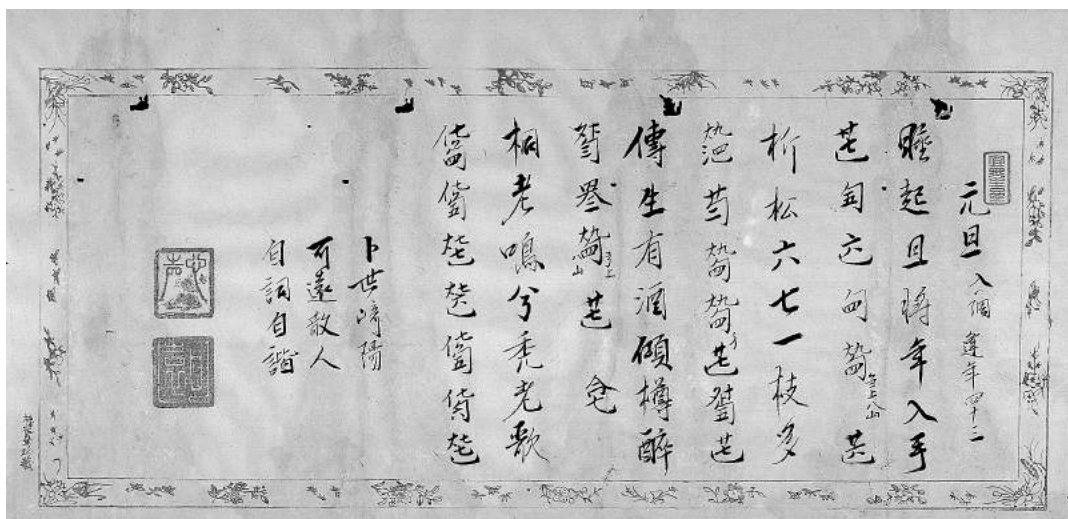
樹陰涼味濃 樹陰 涼味濃^{こま}やかなり

和堅

五言律詩。韻字は逢・松・容・濃（上平声二冬）

林家の門人和堅（字は居中、京都の人）の作。一年ぶりに林家の学





問所がある忍ヶ岡に、花見に訪れた直條を迎えての詩。延宝三年（一六七五）春に直條が勿斎とともに忍ヶ岡に花見に訪れた際の作か（稿末の「解題と書誌」を参照）。

【語釈】

（1）奉汚高覧 相手を敬ってその人に見てもらうことを丁寧にいう語。

（2）岡頭 「岡」は林家の学問所があつた忍ヶ岡（現在の東京都台東区の上野公園一帯）。「頭」は頂上、いただき、またはほとり、付近。

（3）芳約 花見の約束。

（4）傾蓋 もともとは馬車の天蓋と天蓋を寄せ合つて共にいることを指すが、ここでは松の枝葉が天蓋のように張り出ている様子という。

（5）花同去年色 唐・劉希夷「白頭吟」の「年年歳歳花相似、歳歳年年人不同」を踏まえる。

（6）挨在 木々の枝葉が押し合うようにびっしりと茂っているさま。

⑨ 何心声「元旦」

詩箋（沅花斎珍藏）
縦22.2cm×横46.1cm

元旦 入調^① 逢年四十三^②

元旦 調に入る 年に逢うこと四十三

睡起旦将年入手 睡りより起き 旦に年を手に入る
析松六七一枝多 松を析くこと六七 一枝多し
伝生有酒傾樽醉 生に酒有るを伝え 樽を傾けて酔う
桐老鳴兮禿老歌 桐老鳴りて 禿老歌う

ト世崎陽

可遠散人

自調自諧

心声 可遠

七言絶句（琴歌）。韻字は多・歌（下平声五歌）

寛文九年（一六六九）元旦、何心声（作品②の解説を参照）の作。
この年、直條は十五歳、心声は四十三歳。心声は前年に唐通事の職を
辞しており、この作品は、翌年の元旦に、酒を飲み、七絃琴を弾きな
がら、歌に興じる様子を、詩に詠み、琴譜に載せて、直條に送ったも
の。歌辞の左側に記されているのは七絃琴の減字譜。

【語釈】

（1）入調 音楽に合わせる意。

（2）年 正月。新年。

（3）析松六七一枝多 門松を飾るのが四十三回目であること。四
十三歳の年齢を示す。

（4）生 門生。

（5）桐老 七絃琴。老いた桐の木を琴材にしたことからいう。

（6）禿老 作品⑤の「禿生」と同じく、無位無官の己に対する自
嘲。

（7）自調自諧 自ら楽器を奏でながら歌を曲に合わせる意。

10 和堅「雨後即景」

詩箋

縦23.8cm×横11.0cm

雨後即景①

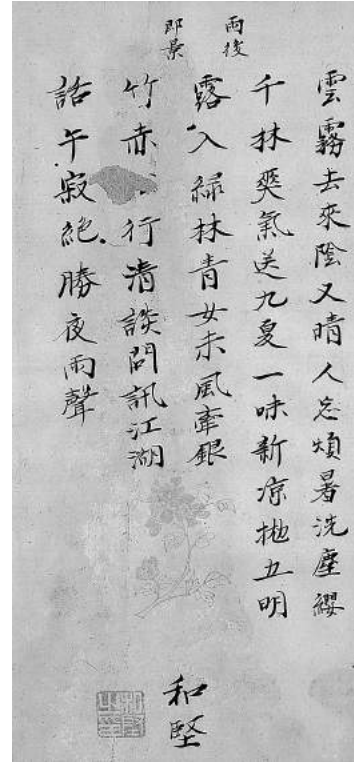
雨後即景

雲霧去来陰又晴 人忘煩暑洗塵纓
千林爽氣送九夏 一味新涼抛五明
露入緑林青女未 風牽銀竹赤行
清談問訊江湖話 午寂絶勝夜雨声

雲霧 去来し 陰り又た晴る
人 煩暑を忘れて 塵纓を洗う
千林の爽気 九夏を送り
一味の新涼 五明を抛つ
露 緑林に入るも 青女未だし
風 銀竹を牽くも 赤行く
清談 問訊す 江湖の話
午寂 絶だ勝る 夜雨の声

和堅

和堅之印



七言律詩。韻字は晴・纓・明・行・声（下平声八庚）

林家の門人堅（作品⑧の解説を参照）の作。一陣の雨に蒸し暑い夏もようやく去り、秋の新涼が訪れた楓園にて、雨後の清談を楽しむといった内容。

【語釈】

- (1) 即景 目の前の景物。
- (2) 塵纓 塵のついた冠の紐。転じて俗世の官職のたとえでもある。
- (3) 九夏 九旬の夏、つまり夏の三ヶ月をいう。
- (4) 五明 「五明扇」、帝舜が作ったとされる扇の名。
- (5) 青女 霜雪を司る女神、転じて霜雪そのものをいう。『淮南子』天文訓に、「至秋三月、（中略）青女乃出、以降霜雪」とある。
- (6) 銀竹 銀色の竹。激しく降る雨のたとえ。唐・李白の「宿蝦湖」詩に、「白雨映寒山、森森似銀竹」とある。

- (7) 江湖 世間、各地、または隠居のこと。
- (8) 午寂 正午の静けさ。
- (9) 夜雨声 蘇軾が弟蘇轍とともに夜雨の音を聞きながら、寝台をならべて清談に興じたという「夜雨対牀」の故事を踏まえ、直條との親密な友情を表す。

⑪ 格峰実外「贈楓園主人賢公求正」

詩箋（麥光室）

縦23.8cm×横44.3cm

贈楓園主人賢公求正

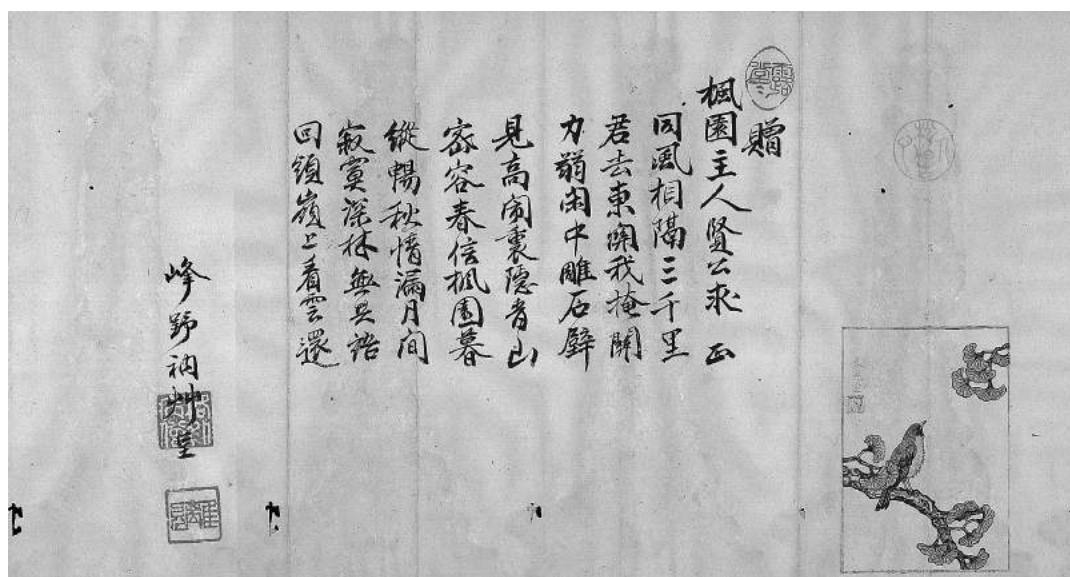
楓園主人賢公に贈りて正さんことを求む

同風相隔三千里 風を同じくして 相い隔つること三千里
君去東関我掩閤^① 君は東関に去り 我れは関を掩^{おほ}う
力弱閑中彫石壁^② 力弱し 閑中 彫石の壁
見高閑裏隱者山^③ 見高し 閑裏^{どうり} 隱者の山
密容春信楓園暮^④ 密かに春信を容^{ひそ}る 楓園の暮
縱暢秋情漏月間^⑤ 縱に秋情を暢^{ほい}ぶ 漏月の間
寂寞深林無共語 寂寞 深林 共に語る無し
回頭嶺上看雲還^⑥ 頭を回^{こえ}らして 嶺上 雲の還^{かえ}るを看^みる

峰野衲 草呈

格外病僧

離見



七言律詩。韻字は関・山・間・還（上平声十五刪）

直條の兄格峰（作品⑥の解説を参照）の作品。落款の「野衲」は「野僧」の意。僧である自分に対する謙称。なお、印に「離見」の別号を用いており、「高岳断橋和尚年譜」によればこれは格峰が延宝六年（一六七八）に峨山和尚から与えられたもので、該詩はそれ以降の作品と見るべきであろう。直條が参勤交代で江戸に詰めている時も、兄弟は頻繁に手紙をやりとりして、相手に対する思いを綴っていたことがわかる。楓園は江戸の青山にあった鹿島藩邸に造営された庭園。楓の木が多く植えられていたことからいう。

【語釈】

（1） 東関 「関東」に同じ。

（2） 関 作品⑥の語釈（1）を参照。

（3） 閑中彫石壁 静かなところに石室を作って修行することをいう。「高岳断橋和尚年譜」（作品⑥の解説を参照）によれば、格峰は延宝四年（一六七六）三月二十四日に出家して、古江田村（現在の古枝村）に祐徳院を建てて修行を始めており、延宝六年に月潭和尚に「石壁亭記」の執筆を頼んでいるので、格峰が修行に使っていた石室を「石壁亭」と称したことがわかる。ちなみに、『文選』には謝霊運の「石壁精舍還湖中」詩が収められており、「石壁精舍」は謝霊運の修行の場であった。格峰が自らの石室を「石壁亭」と称したのは、謝霊運の「石壁精舍」を意識したものかもしれない。

（4） 閑裏隱者山 「閑裏」は喧噪の巷。前句の「閑中彫石壁」と対比させて、弱い自分とは対照的に、見識の高い直條は、騒々しい江

戸市中に身を置きながらも、まるで隠者のような暮らしをしていることをいう。

(5) 春信 春の便り。

(6) 漏月 雲の間から漏れ出でる月光。

12 鍋島直條「雨後即興、奉呈佳賓、要高和」

詩箋

縦33.8cm×横11.0cm

雨後即興、奉呈佳賓、要高和^①

雨後即興、佳賓に呈し奉りて、高和を要む^{もと}

客自桜峯到^② 客 桜峯より到り

楓園開室迎 楓園 室を開きて迎う

清談林露冷 清談に林露冷え

散步徑風晴^③ 散步に径風晴る

来雁高低影 来雁 高低の影

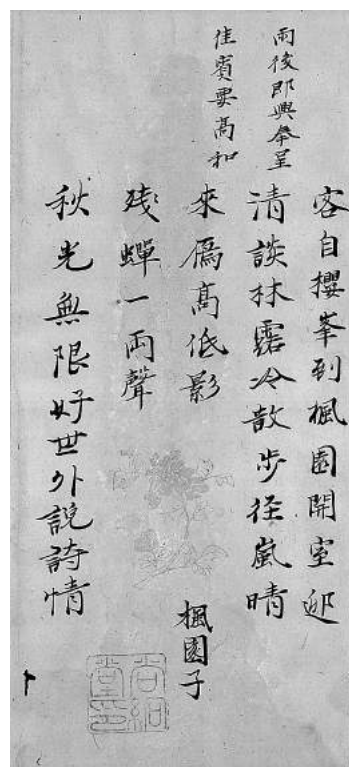
残蟬一両声 残蟬 一両の声

秋光無限好^④ 秋光 無限に好し

世外說詩情^⑤ 世外 詩情を説く

楓園子

尚綱堂印



五言律詩。韻字は迎・晴・声・情（下平声八庚）

作品⑩と同じ日に作られたと見られる直條の詩。押韻は同じく下平声八庚。なお後掲の作品⑬は、押韻こそ異なるものの、その内容から、該詩への唱和詩と考えられる。三つの作品は同じ詩箋を使用しており、同じ日に楓園で即興的に詠まれたものと推測される。『楓園家塵』（作品②の解説を参照）第二三〇冊に該詩が収められている。

【語釈】

(1) 高和 相手が唱和することを敬つていう語。

(2) 桜峯 林家の学問所があった忍ヶ岡（作品⑧の語釈(2)を参照）の別称。桜の木が多く植えられていたことからいう。

(3) 径風 小径にたちこめた霧^{もや}。

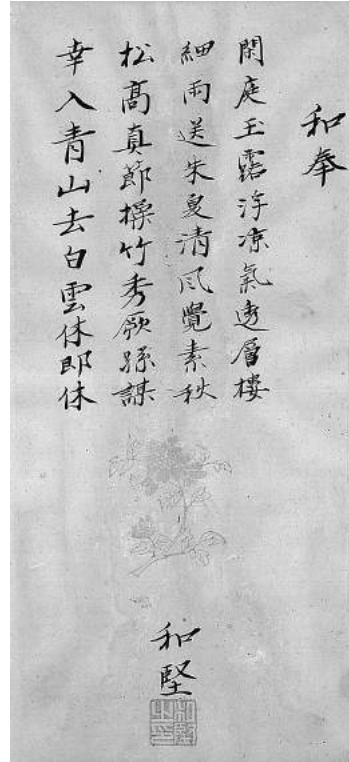
(4) 無限好 唐・李商隐「登楽遊原」詩の「夕陽無限好、只是近黄昏」を踏まえる。

(5) 世外 俗世間を離れた場所。ここでは楓園を指す。

13 和堅「和奉」

詩箋

縦3.8cm×横1.0cm



和奉
和し奉る

閑庭^①玉露浮 閑庭 玉露浮かび
涼気透層楼 涼気 層楼に透る^{とお}
細雨送朱夏 細雨 朱夏を送り
清風覚素秋 清風 素秋を覚ゆ
松高真節操 松高くして 真の節操あり
竹秀厥孫謀^② 竹秀^{ひい}でて 厥^その孫^{はか}を謀る
幸入青山去^③ 幸いに青山に入りて去り
白雲休即休^④ 白雲 休まば^{すなわ}即ち休め

和堅
和堅之印

五言律詩。韻字は楼・秋・謀・休（下平声十一尤）

林家の門人和堅（作品⑧の解説を参照）が、前掲の作品⑫の直條の詩に唱和した作。作品⑩、⑫と同じく、初秋の楓園の雨上がりの光景を詠む。頸聯に見える松と竹は、直條の高潔な人格を表し、「厥孫謀」は、周の武王が子孫のために良計を立てたという『詩経』の詩句を踏まえて、直條が子孫のために遠計を立てるなどして、力を尽くしていることをいう。なお尾聯では、楓園における直條の隠逸的な生き方を表現している。

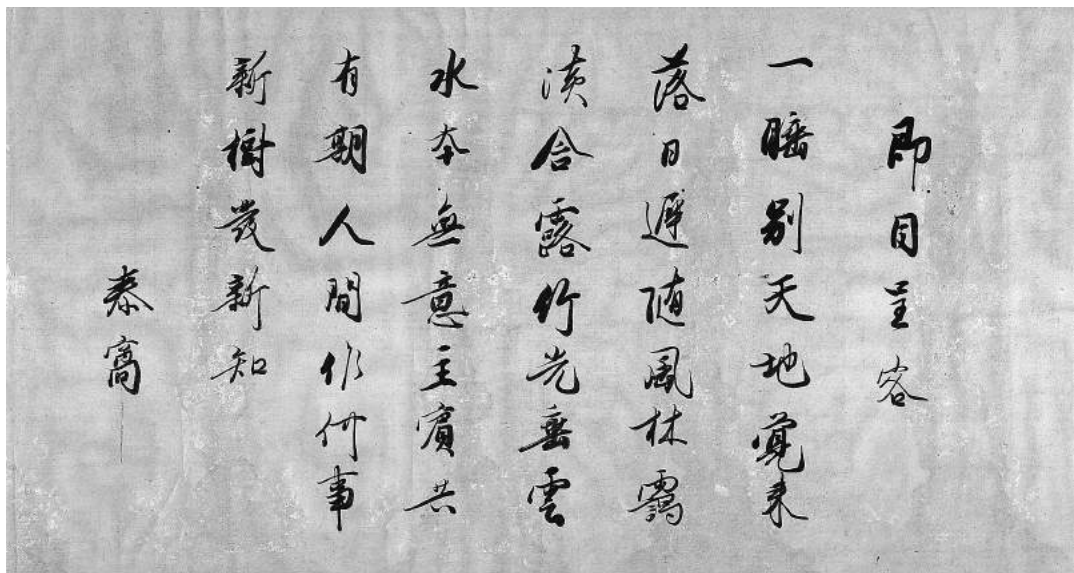
【語釈】

- （1） 閑庭 静かな庭。ここでは楓園を指す。
- （2） 厥孫謀 『詩経』大雅・文王有声の「豊水有芑、武王豈不仕。詒厥孫謀、以燕翼子。武王烝哉」を踏まえて、子孫のために計画を立てたり、努力したりすることをいう。
- （3） 青山 緑の山と、楓園があった青山の地名をかけた表現。
- （4） 白雲 白い雲と鍋島直條の別号「白雲主人」をかけた表現。

14 鍋島直條「即目呈客」

鳥の子紙
縦23.6cm×横44.7cm

即目呈客^①
即目、客に呈す



即目呈客

一睡別天地覺來

落日遲隨風林霽

淡合露竹光垂雲

水本無意主賓共

有期人間作竹事

新樹叢新知

泰窩

一睡別天地

覺來落日遲 落日遲し

隨風林霽^② 風に隨いて林霽^{りんあいす}淡く

合露竹光垂^③ 露に合わせて竹光垂る^{ちくこうた}

雲水本無意 雲水^も本と意無くも

主賓共有期 主賓 共に期有り

人間作何事 人間^{じんかん} 何事をか作さん

新樹叢新知^④ 新樹 新知を叢む^{あつ}

泰窩

五言律詩。韻字は遲・垂・期・知（上平声四支）

直條の作。落款の「泰窩」は直條の号。林鳳岡による「泰窩説」
 『鳳岡林先生全集』卷一〇二は、延宝五年（一六七七）四月一日の
 日付で記されており、したがって直條の該詩はこの年またはそれ以降
 の作品であろう。初夏の夕暮れ、昼寝から目が覚め、新しく相識と
 なった客人を楓園に迎えての作。尾聯の二句に、直條の隱逸的志向が
 よく表れている。『楓園家塵』（作品②の解説を参照）第二三〇冊に該
 詩が収められている。

【語釈】

（1）即目 「即景」に同じく、目にふれるもの、目の前の景物。

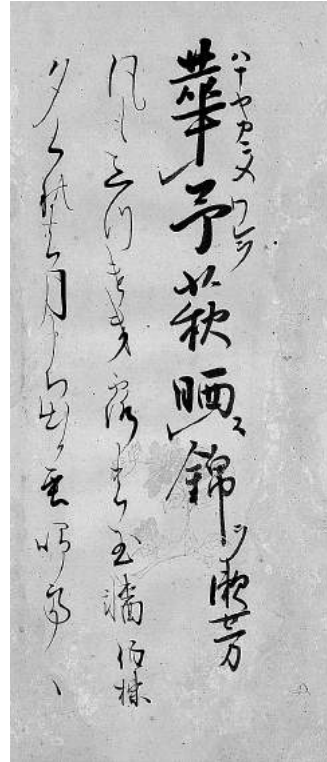
（2）林霽 林にかかった霽^{もや}。

（3）竹光 竹の表皮のつや。

(4) 新知 新しく相識となった人。

15 林鳳岡・鍋島直條〔漢和聯句〕

詩箋
縦83.8cm×横11.0cm



〔発句〕 ハナカシテ 華^レ 予^{ワレヲ} 萩^ス 晒^ス 錦^ヲ

〔脇〕 風もしつけき露の玉牆

〔第三〕 夕くれの月まち出る虫鳴て

漱芳
伯棟

「漱芳」と「伯棟」はそれぞれ林鳳岡と直條の別号。直條生涯の詩文を収めた一大草稿群『楓園家塵』（作品②の解説を参照）第二三〇冊に、この付合三句が収められている。

16 何心声「感近左右、奉和即席尊韻、上呈」

詩箋（浪花斎珍藏）
縦23.3cm×横45.5cm

感近左右、奉和即席尊韻、上呈

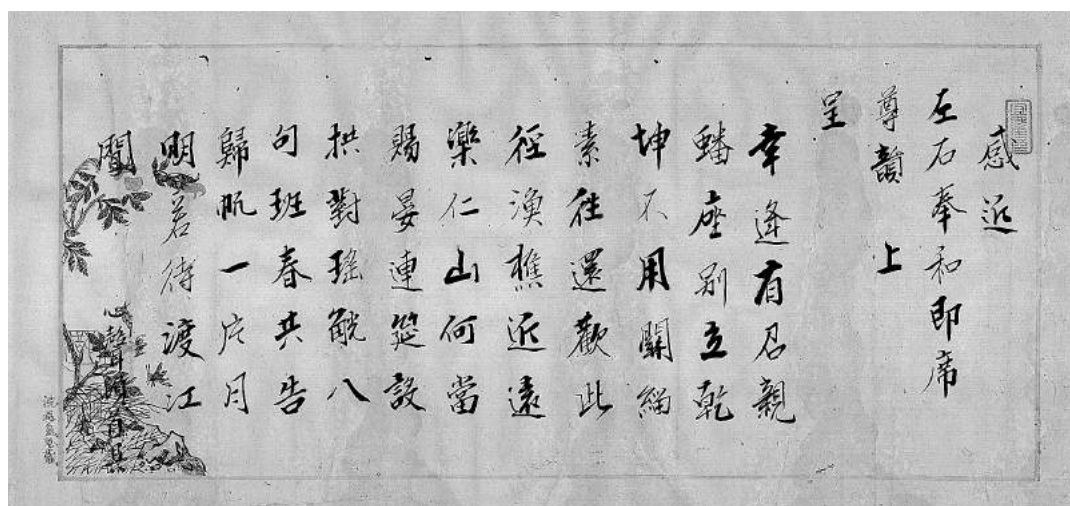
左右に近づくに感じ、即席の尊韻に和し奉りて、上呈す

幸逢有召親蟠座 ^①	幸いに召し有るに逢い	親しく蟠座す
別立乾坤不用閑 ^②	別に乾坤を立つるも	閑を用いず
緇素往還飲此徑 ^③	緇素 往還	此の徑を飲む
漁樵近遠樂仁山 ^④	漁樵 近遠	仁山を樂しむ
何当賜宴連筵設 ^⑤	何ぞ当んや	宴を賜りて 連筵設けられ
拱対瑤舫八句班 ^⑥	拱して瑤舫 ^{ようぼう} に対し	八句を班 ^{たま} わるをや
春共告歸帆一片 ^⑦	春 共に歸るを告ぐ	帆一片
月明若待渡江間 ^⑧	月 明るくして	待つが若し 渡江の間

心声 頓首具

七言律詩。韻字は関・山・班・間（上平声十五刪）

何心声（作品②の解説を参照）の作。制作年は未詳だが、直條に招かれて鹿島を訪れ、宴の席上にて直條の即興の詩に唱和したもの。首聯と頷聯の内容から、心声が鹿島に滞在する間、二人は打ち解けて親密に語り合い、仏教と世俗の間を往来しながら、近遠の山川に出かけて隠者のような楽しみをなしたことがわかる。また頸聯の表現から



は、直條が心声を迎えて、連日、宴を設け、詩のやりとりを行ったことが窺える。さらに尾聯の内容から、心声は春が去る三月三十日頃に長崎へ帰ったと見られる。

【語釈】

(1) 蟠座 胡座をかくこと。「盤坐」に同じ。

(2) 関 作品⑥の語釈(1)を参照。

(3) 緇素 黒衣(僧服)と白衣。転じて僧侶と俗人。

(4) 漁樵 魚を採り木を切ること。転じて俗世間から離れて暮らすたとえ。

(5) 樂仁山 『論語』雍也篇の「知者樂水、仁者樂山」を踏まえた表現。

(6) 何当 「何況」に同じ。

(7) 連筵 連日続く宴会。

(8) 拱 拱手。両手を胸の前で重ね合わせ、敬意を表す礼。

(9) 瑤觥 玉の杯。杯の美称。また、美酒。

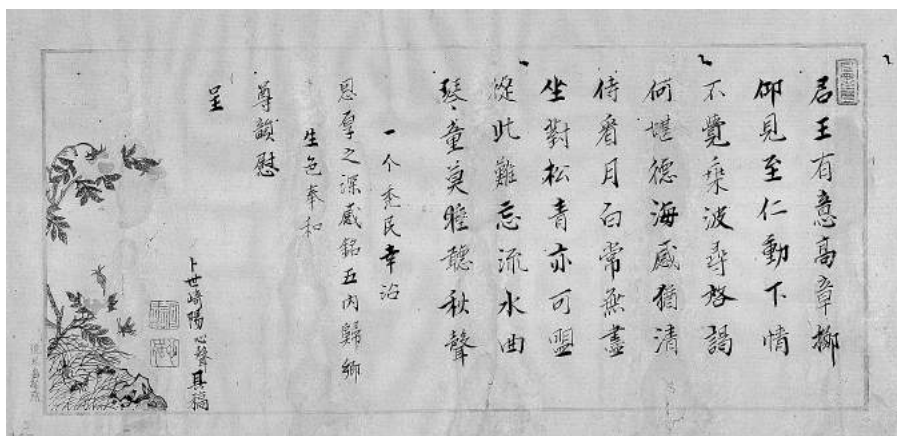
(10) 八句 律詩を指す。

(11) 春共告歸 「春帰」については作品⑤の語釈(7)を参照。

(12) 渡江 「江」は長崎県の多良山に源を発し、諫早湾(有明海)に注ぐ本明川のことか。江戸時代には鹿島と長崎を往来するのにこの川を利用することが多かった。

何心声「一个秃民、幸治恩厚之深、感銘五内、帰郷生色、奉和尊韻、慰呈」

詩箋（浣花齋珍藏）
縦3.3cm×横5.5cm



君王有意高章擲^①
仰見至仁動下情^{②③}
不覺乘波尋啓謁^④
何堪德海感猶清^{⑤⑥}
待看月白常無尽^⑦
坐对松青亦可盟^⑧
從此難忘流水曲^⑨
琴童莫睡聽秋声^⑩

君王 意有りて 高章を擲ては
至仁を仰ぎ見て 下情を動かす
覺えず 波に乗り 尋ねて謁を啓げば
何ぞ堪えん 徳海のごとく 感猶お清きに
待ちて看る 月白く 常に無尽なるを
坐して対す 松青く 亦た盟うべきに
此れより忘れ難し 流水の曲
琴童 睡る莫かれ 秋声を聴かん

一个秃民、幸治恩厚之深、感銘五内、帰郷生色、奉和尊韻、慰呈

一个の秃民、幸いに恩厚の深きに沿いて、五内に感銘し、帰郷して色を生ずれば、尊韻に和し奉り、慰呈す

ト世崎陽 心声 具稿

可遠 心声

七言律詩。韻字は情・清・盟・声（下平声八庚）

何心声（作品②の解説を参照）の作。前掲の作品⑩の詩と同じ時期に作られたもの。使用されている詩箋も同じである。心声が鹿島から長崎に帰郷した後、招待してくれた直條へのお礼の気持ちと二人の深い友情を詠んで送った詩。

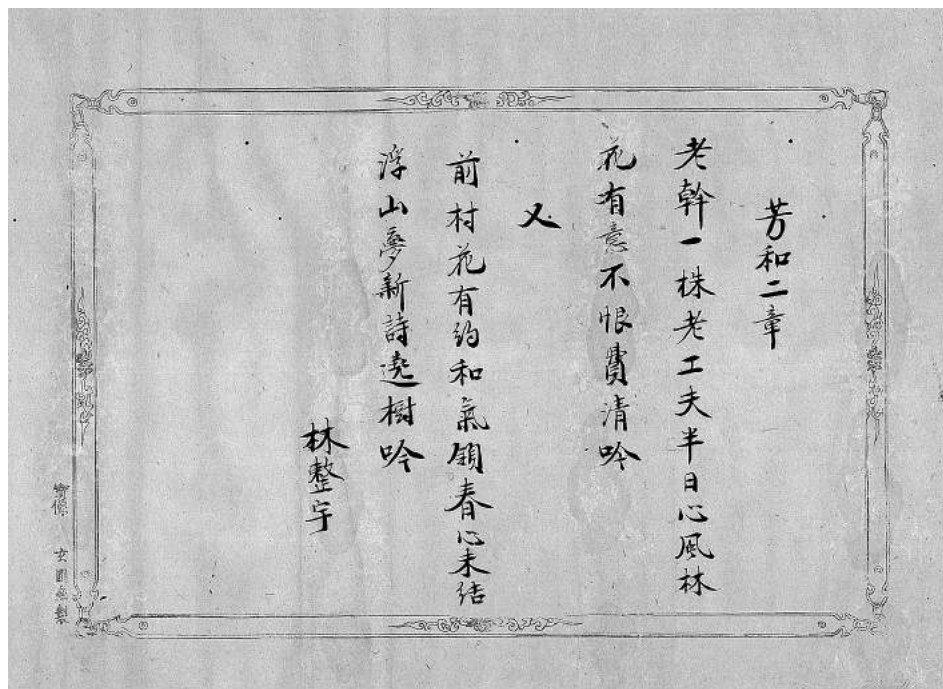
【語釈】

- (1) 高章 相手の詩文に対する敬称。「高」については、作品⑦の語釈(4)を参照。
- (2) 至仁 最高の仁徳。
- (3) 下情 自分の心情(へりくだった表現)。
- (4) 啓謁 地位の高い人に会うこと。
- (5) 徳海 仏教用語。功德が海のように大きいことをいう。
- (6) 月白 月が明るいこと。蘇軾の「後赤壁賦」に、「有客無酒、有酒無肴、月白風清、如此良夜何」とある。
- (7) 無尽 無尽蔵。蘇軾の「前赤壁賦」に「惟江上之清風与山間之明月、耳得之而為声、目遇之而成色、取之無禁、用之不竭。是造物者之無尽蔵也」とあるのを意識した表現か。
- (8) 松青 変わらぬ友情のたとえ。唐・孟郊の「答友人」詩に、「砥行碧山石、結交青松枝」とある。
- (9) 流水曲 七絃琴の代表的な曲の一つ。伯牙と鍾子期の「高山流水」の故事を踏まえて、直條との深い友情を表す。
- (10) 琴童莫睡聴秋声 「琴童」は七絃琴を持ち運ぶ小童。歐陽脩の「秋声賦」に、「亦何恨乎秋声。童子莫对、垂頭而睡。但聞四壁虫声、唧唧如助余之歎息」とあるのを踏まえた表現。
- (11) 禿民 前出の「禿生」(作品⑤)、「禿老」(作品⑨)と同じく、無位無官の己に対する自嘲。
- (12) 沿 近づく意。
- (13) 五内 五臓に同じ。心・腎・肺・肝・脾の五種の内臓。
- (14) 生色 生き生きとしたさま、または輝きを増すこと。

18

林鳳岡「芳和二章」

詩箋(玉像 玄圃斎製)
縦21.4cm×横29.6cm



芳和二章^①

芳和二章

老幹^②一株老 老幹 一株 古い
工夫^③半日心^④ 工夫 半日の心
風林花有意 風林 花に意有れば
不恨費清吟 恨みず 清吟を費やすを

五言絶句。韻字は心・吟（下平声十二侵）

又

前村花有約 前村 花に約有り
和氣領春心 和氣 春心を領す
未結浮山夢^⑤ 未だ結ばず 浮山の夢
新詩遶樹吟 新詩 樹を遶^{めぐ}りて吟ず

林整宇

五言絶句。韻字は心・吟（下平声十二侵）

林鳳岡が直條に唱和した連作詩。後掲の作品²³の直條の詩に唱和したものと見られる。『鳳岡林先生全集』卷三十八に「和藤孟幹韻二首」として収められているが、第一首の起句の「老幹」、結句の「恨」、

「清」の字が、全集ではそれぞれ「清操」、「惜」、「新」の字になっている。第二首は同じである。延宝五年（一六七七）春の作。

【語釈】

（1） 芳和 花の唱和詩。
（2） 老幹 歳寒の三友の一つに数えられる梅の樹に、直條をたとえた表現か。ただ、若い直條には相応しくないとえと判断したから、全集では「清操」に変えたのであろう。

（3） 工夫 造詣。努力。修行。

（4） 半日心 俗塵を離れた清らかな心。南宋・王卿月の「題北山玉寒堂三首」其二（『天台統集』別編卷五）に、「客来清話固所欲、遇酒草酌庸何傷。是非有耳不願聽、乞我半日心清涼」とあるのを踏まえた表現か。

（5） 浮山夢 「羅浮之夢」または「羅浮夢」に同じ。隋の趙師雄が羅浮山の梅花村に宿し、夢の中で梅花の精の美女に逢ったという故事にもとづく表現。故事は柳宗元の『竜城録』に「趙師雄醉憩梅花下」という題で記されている。羅浮山は広東省増城県の東にある山。山麓は梅の名所として古来名高い。

19 人見竹洞（おほつごもりのふみ）

楮紙

縦21.4cm×横58.0cm

たからほとおそろしきものは、
又もあらし。世の中の人

心をまよはし、年の暮も

しつかならず、あしをそらに

まとひ、あはたゝしきも、此

おそろしきものゆへそかし。

されはひしりの御代には、

金をは海にしつめ、玉をは

渚にすつへきものなりし。

葛の国はたからなき国なれば、

この翁もおそろしきことをは

しらてすきなん。青山の

山人いひおこせたまひけるは、

おしむ年もあらず、待へき、

春もなし、といへるを世に

たくひなくおもひ、この翁も

おなし心なれば、かくいふ

めり。この比は、こととふへき雪も

ふらず、小車ひくへきわらはも

なく、舟に棹さす人さへも

なし。日々に風すさましく

吹いて、四方もくらき程

なれば、ひとり埋火を友

として、いにしへの世を見

きくほと、心のたのしみは

なけれ。山人もさおもひ

給らめ。返し草々

山里は雪けの雲の

たちるにも世をへたてたる

春を松の戸

葛の翁

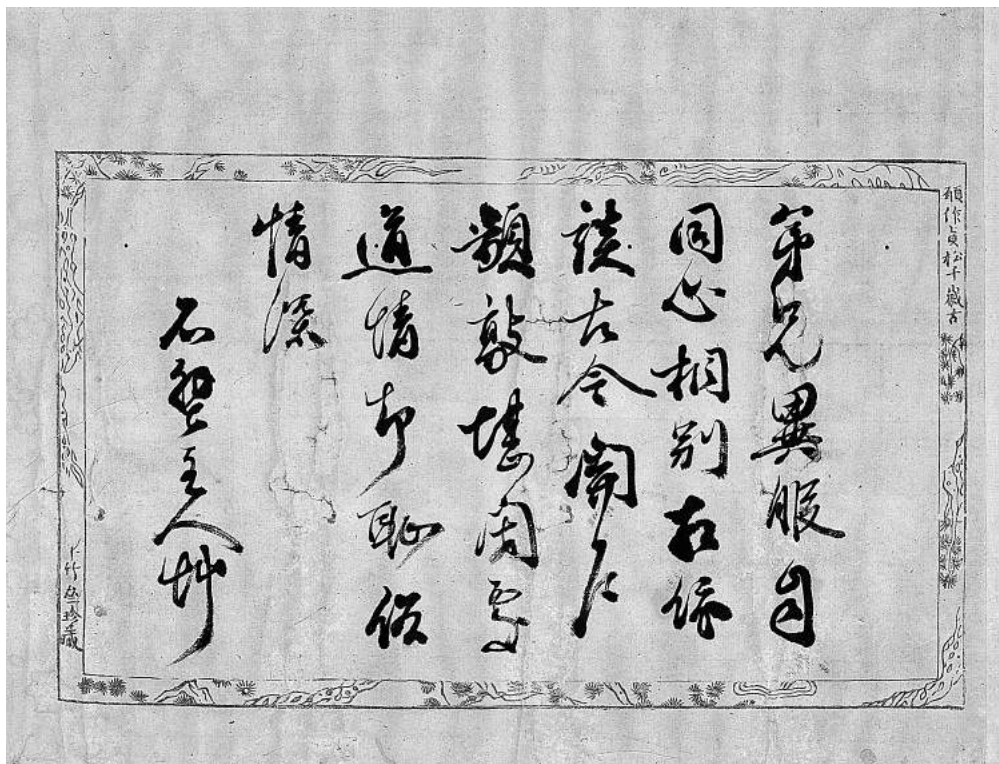
人見竹洞（作品③の解説を参照）の大晦日の作。落款の「葛の翁」は作品③の付書翰の「葛民」と同じく、竹洞の別号。竹洞の居所は、隅田川を挟んだ上野寛永寺の対岸、下総国葛飾郡にあり、別荘を両国橋の上流「牛島」に営んだ。「葛の翁」「葛民」の「葛」はこの地名による。

【語釈】

（１） あしをそらにまとひ 『徒然草』十九段の「晦日の夜、足を空に惑ふ」による。

（２） 金をは海にしつめ、玉をは渚にすつ 『徒然草』三十八段の「金は山に棄て、玉は渚に投ぐべし」、また後漢・班固「東都賦」〈「文選」所収〉の「金を山にすて、珠を渚に沈む」によったと思われるが、「山」を「海」と記したのは、別に典拠があったか、あるいは単なる思い違いであったか、未詳。

（３） 埋火を友として 『方丈記』第三段末の「或はまた、埋み火をかきおこして、老いの寢覚めの友とす」によったか。



20 格峰実外〔無題〕

詩箋（十竹斎珍藏）
縦21.4cm×横27.6cm

弟兄異服^①自同心 弟兄 服を異にするも 自ら心と同じくす
相別相依談古今 相い別れ 相い依りて 古今を談ず
開戸頻敲堪閉処 戸を開かんと頻りに敲くも 閉するに堪る処
道情^②却恥佞情深 道情 却つて恥ず 佞情の深きに

石壁主人^③ 草

七言絶句。韻字は心・今・深（下平声十二侵）

直條の兄格峰（作品⑥の解説を参照）の作。黄檗僧となった格峰と大名となった直條。住む世界こそ異なるものの、兄弟愛は深く、二人は時折相い依りて古今往來を清談した。転句と結句では、石室にて修行を積み世俗を脱したはずの自分の心が、却つて世俗に生きる弟（直條）の心に及ばないことを恥じる気持ちを詠んでいる。

【語釈】

（1）異服 服装を異にすること。僧衣と俗衣。転じて生きる世界が異なる意。

（2）道情 世俗を脱した心。これに対して「佞情」は俗情の意か。

（3）石壁主人 禪の修行を行った石室「石壁亭」にちなむ格峰の

別号。作品⑥の解説を参照。

〔21〕 梅嶺道雪「偈二首、奉謝嗣君右京大夫大檀越光貢
敝刹、併祝」

鳥の子紙
縦19.4cm×横23.2cm

偈二首、奉謝嗣君右京大夫大檀越光貢敝刹、併祝

偈二首、嗣君右京大夫大檀越の敝刹に光貢せしに謝し奉
り、併せて祝す

妙年^④慕道古来稀 妙年にして道を慕うは 古来稀なり
遠振^⑤嘉声向上機 遠く嘉声を振うは 向上の機あり
昨夜^⑥報言^⑦台旆^⑧至 昨夜 言を報ず 台旆至ると
岩^⑦局^⑧特地^⑨発光輝 岩局 特地に 光輝を発す

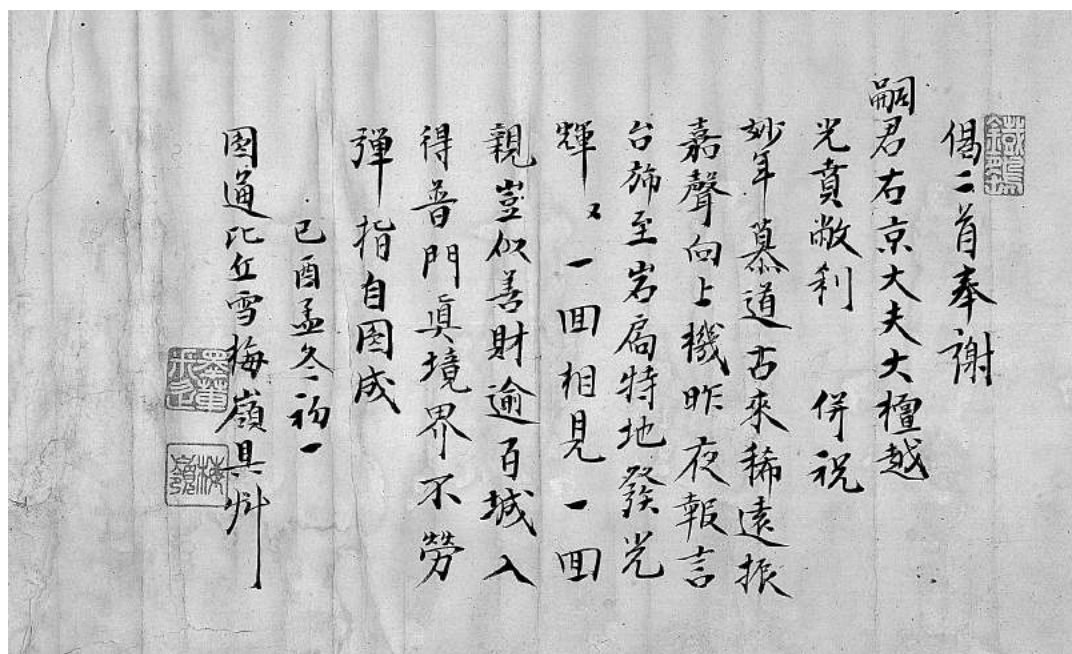
七言絶句。韻字は稀・機・輝（上平声五微）

又

一回相見一回親 一回相見れば 一回親しむ
豈^⑨似^⑩善財^⑪逾^⑫百城 豈に似たらん 善財 百城を逾ゆるに
入得^⑬普門^⑭真境界 入り得たり 普門 真の境界
不^⑮勞^⑯彈指^⑰自^⑱図^⑲成 弾指を勞せずして自ら図成る

己酉孟冬初一

円通比丘雪梅嶺 具草



偈二首奉謝

嗣君右京大夫大檀越

光貢敝刹 併祝

妙年慕道古来稀
遠振嘉声向上機
昨夜報言台旆至
岩局特地發光輝
一回相見一回
親豈似善財逾百城
入得普門真境界
不勞彈指自図成

己酉孟冬初一

円通比丘雪梅嶺具草



釈蓮 梅嶺

七言絶句。韻字は城・成（下平声八庚）

寛文九年（一六六九）十月一日の黄檗僧梅嶺道雪（一六四一〜一七一七、詳しくは稿末の「解題と書誌」を参照）の作。直條が藩主の嗣子となったことへの賀意と、その彼が福源寺に來訪したことに對する謝意を託した詩。当年、直條は十五歳、梅嶺は二十九歳。この頃より直條は梅嶺から漢詩文の手ほどきを受け、同時に黄檗宗に心を寄せたと見られる（『楓園家塵』第二三〇冊「感往録」）。

【語釈】

- (1) 右京 直條の通称。
- (2) 光賁 「光臨」に同じ。
- (3) 敝刹 自らが住する寺院をへりくだっていう語。ここでは鹿島の福源寺を指す。
- (4) 妙年 少年。若年。
- (5) 報言 知らせる意。
- (6) 台旆 「台」は「嗣」の意、「旆」は旗もしくは旗飾り。藩主の嗣子となった直條の旗印をいう。
- (7) 岩窟 岩石で作った戸。岩戸、岩扉。
- (8) 特地 ことさらに、特に、特別の意。「地」は助辞。
- (9) 善財 善財童子のこと。『大方広仏華嚴經』に説かれる修行者。文殊菩薩から普賢菩薩まで五十三人の善知識を歴訪して教えを

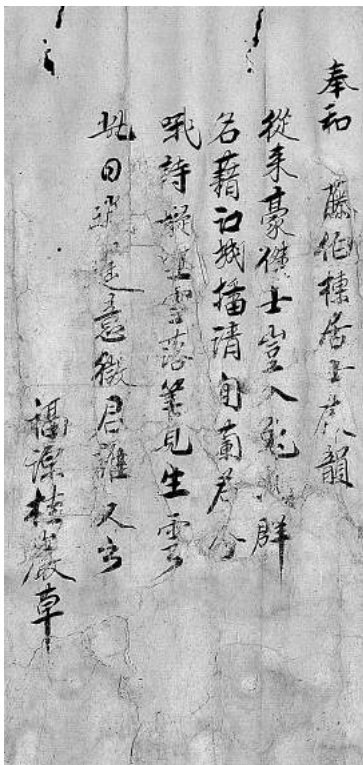
受けたとされる。

- (10) 百城 『大方広仏華嚴經』に見える次の文章を踏まえる。「爾時善財童子、如是經遊百一十城、到普門城辺、思惟而住。觀察十方、一心專求文殊師利」。
- (11) 普門 仏教で説く、一切衆生を円通せしめて摂入する広大な法門。転じて仏教そのものを指す。
- (12) 境界 境地。
- (13) 彈指 親指と人差し指をはじいて、音を出すこと。ごく短い時間のたとえ。
- (14) 図 浮図つまり仏塔。転じて仏教で説く功德。

22 桂巖明幢「奉和藤伯棟居士侯韻」

鳥の子紙

縦23.6cm×横11.0cm



奉和藤伯棟居士侯韻

藤伯棟居士侯の韻に和し奉る

從來豪傑士 從來 豪傑の士

豈入免狐群 豈に免狐の群れに入らん

名籍⁽²⁾江城播 名籍 江城（江戸）に播く

清閑蘭若分 清閑 蘭若に分かつ

哦詩疑望雪 詩を哦えば 雪を望むかと疑つ

落筆見生雲 筆を落とせば 雲を生ずるを見る

此日逍遙意 此の日 逍遙の意

微君誰又云 君微かりせば 誰にか又た云わん

福源桂巖草

五言律詩。韻字は群・分・雲・云（上平声十二文）

黄檗僧桂巖明幢（一六二七～一七一〇、詳しくは稿末の「解題と書誌」を参照）による唱和詩。江戸に出て鹿島藩の襲封を認められ、参勤交代で鹿島に戻った直條が、福源寺を訪れて詠んだ詩に対する唱和

の作と見られる。詩や書に秀でている直條の優れた才能を褒め称えるところともに、そうした文雅を解する大名直條の訪問を受けて、胸襟を開き清談する自らの喜びを詠む。

【語釈】

（1）免狐 ウサギとキツネ、転じて小人のたとえ。

（2）名籍 「名籍」に同じ。姓名や身分などを記した公の台帳。転じて（ここでは）名声をいう。

（3）蘭若 仏教用語。寺院。阿蘭若の略。ここでは福源寺を指す。

23 林鳳岡・人見竹洞・鍋島直條「梅辺喜客至」

詩箋（浮碧 玄圃斎製）
縦22.0cm×横30.0cm

梅辺喜客至

梅辺に客の至るを喜ぶ

林整宇

時^①有孤山客 時に孤山の客有り

偶^②逢姑射神 偶たま 姑射の神に逢う

金鬚^③含露脆 金鬚 露を含みて脆らかく

玉貌^④刻氷新 玉貌 氷を刻みて新たなり

隱操^⑤巢由輩 隱操 巢由の輩

風流^⑥晋宋人 風流 晋宋の人

莫辞^⑦詩酒愛 辞する莫かれ 詩酒の愛

惜此十分春 此の十分の春を惜しまん

五言律詩。韻字は神・新・人・春（上平声十一真）

梅邊喜客至

林整字

時有孤山客偶逢姑射神金鬚含露
脆玉貌刻冰新隱操巢田革風流晉
衆人莫辭詩酒愛惜此十分春

同

野節

午天雲淡半輪月東牖風香一樹花湖
上時看雙鶴舞孤山春色在林家

又

梅窓一樽酒風暖暗香新片々浮花去
盃中別有春

同

藤孟幹

梅邊一樽酒微醉百年心但識春光好
繞林螢亦吟

同

野節

午天雲淡半輪月	午天	雲淡し	半輪の月
東牖風香一樹花	東牖	風香る	一樹の花
湖上時看雙鶴舞	湖上	時に看る	雙鶴舞うを
孤山春色在林家	孤山の春色	林家に在り	

七言絶句。韻字は花・家（下平声六麻）

又

梅窓一樽酒	梅窓	一樽の酒
風暖暗香新	風暖かく	暗香新たなり
片片浮花去	片片として	浮花去り
杯中別有春	杯中	別に春有り

五言絶句。韻字は新・春（上平声十一真）

同

藤孟幹

梅辺一樽酒 梅辺 一樽の酒
微醉百年心^⑭ 微醉す 百年の心
似識春光好 春光の好きを識るが似く^⑮
繞林鶯亦吟 林を繞りて 鶯も亦た吟ず

五言絶句。韻字は心・吟（下平声十二侵）

林鳳岡の五言律詩に、人見竹洞（野節）が七言絶句と五言絶句を各一首、鍋島直條（藤孟幹）が五言絶句一首を以て唱和し、一枚の詩箋にまとめたもの。初春の季節、直條と竹洞が忍ヶ岡の林家に梅の花見に訪れた際の作と見られる。

鳳岡の五律は、まず首聯において竹洞と直條をそれぞれ北宋の林逋（孤山の客）と貌姑射山の神人にたとえ、頷聯において彼らの非凡な風貌を描き、頸聯においては彼らを許由や巢父、陶淵明にたとえて、その隠者のような節操と風流を称える。そして尾聯においては、詩と酒によって春を存分に楽しもうと二人を誘う。『鳳岡林先生全集』巻十二に同文で収められており、延宝五年（一六七七）春の作と判断される。

続いて竹洞の七絶は、よく晴れた正午の空にかすかにかかっている弓張り月と東の窓に香る梅の樹、湖上に舞うつがいの鶴を描くことに

より、孤山の春景色は「林家」にあるという。むろんこの「林家」とは、孤山にあった林逋の隠居を指すと同時に、忍ヶ岡にある林鳳岡の家を指すのである。そして五絶は、梅の香る窓辺にて、落ちた花びらが水に浮かんで流れていく情景を見ながら、酒を飲み、春を惜しむことを詠む。鳳岡の詩と同じ韻をふむ。ただ、二首とも『人見竹洞詩文集』（作品⑬の解説を参照）には収められていない。

最後の直條の五絶は、梅の樹の下で酒を飲み、いつまでも変わらぬ三人の友情に心が酔いしれることを詠む。なお、この詩は前掲の作品⑬、林鳳岡の「芳和二首」と同じ韻字を用いており、内容も同じく梅の花を詠んでいることから、作品⑬はこの詩に対する唱和詩である可能性が考えられる。『楓園家塵』（作品②の解説を参照）第二三〇冊に該詩が収められている。

【語釈】

（１） 孤山客 「孤山」は西湖の中にある島。北宋時代の文人林逋がここに隠棲して、梅を妻とし鶴を子として過ごしたことで知られる。

（２） 姑射神 貌姑射^{はこや}の山の神人。『莊子』逍遙遊篇に見える。

（３） 金鬚 黄金色のひげ、または堅いひげ。

（４） 玉貌刻氷新 姑射神にたとえられる直條の容貌が、まるで氷を彫刻したかのように清らかで美しいことをいう。『莊子』逍遙遊篇に、「貌姑射之山、有神人居焉。肌膚若氷雪、綽約若処子」とあるのを踏まえる。

（５） 巢由 帝堯の時代の隠者である巢父^{そうは}と許由^{きょゆう}。隠者の代表的な人物とされる。

(6) 晋宋人 許由・巢父と対句になっていることから、東晋の陶淵明を指すと考えられる。

(7) 十分春 春を指す。北宋・蘇頌の「再和(再和暮春)」詩に「十分春色九分残、計日追遊至夜闌」とあるのを踏まえるか。

(8) 午天雲淡 「午天」は正午。北宋・程顥の「偶成」詩に、「雲淡風輕近午天」とあるのを踏まえた表現か。

(9) 東牖 東の窓。

(10) 孤山春色在林家 北宋の林逋は杭州西湖の孤山に家を構え、鶴と梅を愛好した。ここでは林整字を林逋に擬えている。

(11) 暗香 ほのかに漂う梅の香氣。林逋の「山園小梅」詩に、「疎影横斜水清淺、暗香浮動月黃昏」とあるのを踏まえる。

(12) 浮花 落ちて水面に浮かぶ花びら。

(13) 杯中別有春 蘇軾の「寓居合江樓」詩に「三山咫尺不歸去、一杯付与羅浮春」とあり、その自注に「予家釀酒、名羅浮春」とあることから、転じて「羅浮春」は美酒の代名詞となった。したがってこの句は杯の中に美酒があることをいう。

(14) 百年心 いつまでも変わらない気持ち。唐・王昌齡の「少年行二首」其二に、「夜闌須尽飲、莫負百年心」とある。

解題と書誌

井上 敏幸

本詩箋巻『詩文』一卷は、料紙二十三枚（内、詩箋十五枚、鳥の子紙五枚、楮紙三枚）に、鳳岡（漢詩四首）・心声（漢詩五首）・竹洞（漢詩三首）・逸民（漢詩一首）・格峰（漢詩四首）・假我堂人（漢詩一首）・和堅（漢詩三首）・直條（漢詩三首）・梅嶺（詩偈二首）・桂巖（詩偈一首）、十名の漢詩二十六首と、竹洞の和文二篇および鳳岡と直條の漢和聯句（発句・脇・第三の付合三句）を収め、卷子装一卷にまとめたものである。この二十三枚の料紙の内、十五枚は、中国から輸入されたいわゆる色刷の詩箋であり、あとの八枚の内の五枚は鳥の子紙で、残る三枚は楮紙が用いられている。詳しくは、書誌の項の「料紙一覽」を参照頂きたいが、色刷の詩箋は、多種類あつて注目される。中でも多色刷の「銀杏に小鳥」^(十)、「草虫花卉」^(十一)、「岩に花卉」^(十二)等の華やかさには眼を見張るものがあり、「蓮と鸛」^(十三)、「樹下白象」^(十四)の「鸛」と「白象」とは空摺の技法で表現されたものであり、明末の版画摺刷技術の高さを窺うことができると同時に、当時の文化人達が愛好してやまなかった風趣を、直に感じとることができるといつてよいように思う。

次に、本巻所収作品の執筆年次と、直條が本巻をまとめた時期、およびその折りの直條の編集意図について、いささか考えてみると、本巻中には、執筆年月日が明記されている作品が二つある。一つは、梅嶺の七絶二首（作品②）詠吟の日付「己酉孟冬初一」寛文九年十月一

日」と、いま一つは、逸民の七律（作品④）の詩題「己未元日」↓延宝七年正月元旦である。この寛文九年（一六六九）から延宝七年（一六七九）までの十一年間は、直條の年齢でいえば、十五歳から二十五歳までに相当する。本巻がまとめられた時期についての記載等は一切なく、作品の内容や作者との交遊といった点より考えなければならぬが、おそらく延宝七年をさほど下ることはないように思われる。

本巻に展開される直條十五歳から二十五歳までの十一年間におよぶ詩文の世界は、元禄時代を代表する文人大名としての直條の生涯を決定づける人々との出会いが実現された年代であつたという意味において、この期間が、改めて注目されるのである。青年直條の文人としてのその人間味の豊かさが、様々に語られていることが、本巻収載の幾つかの作品から読み取れるからである。そうした直條の姿を把握するために、本巻収載の作品と関連を持つと考えられる直條の文事にかかわる事項を、直條が二十二歳の折に、自ら記した履歴書『感往録』（『楓園家塵』巻百二十二所収 祐徳博物館中川文庫蔵）の十五歳から二十二歳までの記事の中から抜き出してみることとする。

寛文九年（一六六九） 十五歳 漸ク意ヲ儒業ニ注グ。

師友ノ助ケナキヲ以テ、之ヲ奈何トモスルナシ。偶、黄檗ノ梅嶺師来リテ福源寺ニ住ス。余、行キテ相イ見エ、学問益ヲ請イ、詩筒相イ遞ス。是ニ於テ禪ニ帰スルノ志有リ。

是夏、旧病ヲ再発ス。（中略）病中、唯学業ヲ談ジ、或ハ詩ヲ唱シ、歌ヲ詠ズ。（中略）秋ニ到リ病全ク愈ユ。

歳末、某人ヲ介シテ自歌七首ヲ以テ、中院亜相通茂卿ニ呈シテ、訂正ヲ受ク。亜相、三首ヲ点ジテ、以テ称美ス。

寛文十年（一六七〇） 十六歳（記事なし）

寛文十一年（一六七二） 十七歳 家君、余ヲシテ本宅ニ移居セシム。

秋七月、故甲斐守直澄ノ女ヲ娶ル。

九月、家君武城ニ朝ス。余モ亦陪従ス。此行、道ニ京洛ヲ過ル。伏見ニ止ルコト日有リ。其間、往キテ觀ル所、禁裏・仙洞、及び建仁寺・東福寺・南禅寺・妙心寺・仁和寺・祇園・清見・嵯峨・嵐山・宇治・八幡等ナリ。余、深草元政子ノ隱逸ヲ慕ウ。故ニ彼旧蹟ヲ尋ネ、其墓ニ拝シ、一篇ヲ題シテ去ル。冬十月、江城ニ到ル。

寛文十二年（一六七二） 十八歳 春正月、尚舍忠房ノ館ヲ過リ、

林学士・整宇・野節・伯高庸ニ会ス。

二月十九日、始テ大君ノ幕下ニ拝シ奉ル。家君嘉シテ寢ズ。

此春、始テ藤勿斎ノ芝園ノ家ニ遊ブ。此ヨリ志ヲ同ジクシテ逆ウ莫シ。或ハ經史ヲ談ジ、或ハ筆勢ノ肥瘦ヲ論ジ、相イ對シテ我ヲ忘ル。

夏五月、忠房ノ席ニ一絶ヲ作シ、林学士ニ呈ス。学士之ニ和ス。自後、林家ノ交義逐年愈渥ク、詩筒往復ス。野節モ亦忘年ノ交リ深ク、道ニ誘クコト尤厚シ。詩賦ヲ作ル毎ニ、其慈誨ヲ受ケザル無シ。

冬十二月、家君、病ニ依リ致仕ス。

辱クモ采地ヲ以テ余ニ賜ウ。二十八日、朝散太夫ヲ拝ス。

寛文十三年（一六七三） 延宝元年（九月廿一日改元） 十九歳 元會。官衣ヲ着シテ登城ス。劍馬ヲ獻ジテ拝謁ス。御歴ヲ賜

リ、御衣一襲ヲ受ク。

此春、野子苞ト芝園ニ会ス。詩話ニ日ヲ消ス。殆旧知ノ如シ。

夏四月、登營。辱クモ玉音有リテ、帰国ノ暇ヲ賜イ、時服五襲ヲ拝戴ス。

五月、發途。六月、藤津ノ故園ニ到ル。

延宝二年（一六七四） 二十歳 三月、再ビ江城ニ朝ス。

延宝三年（一六七五） 二十一歳 春三月、日野重相弘資卿、皇命ヲ承リテ、江城ニ至ル。余、彼旅館ニ赴キ、面ヲ識リ、和歌ヲ問ウ。肯テ其功拙ヲ義論シ、或ハ拙語ヲ呈シテ、点竄ヲ乞ウモノ多シ。春來リテ重相洛ニ帰ル。余、之ヲ送り、和歌ヲ呈ス。公モ、亦答歌ヲ賜ウ。

此春、勿斎ト忍、岡ニ遊ンデ花ヲ觀、即席ニ律詩三章ヲ賦ス。学士之ヲ嘉賞シ、其韻ニ磨ギ、整宇及ビ門生林横・和堅等ヲシテ、之ニ和セシム。他日、学士排律ヲ作り之ヲ寄ス。弱冠僅ニ一ヲ加ウルニ品題早ニ二三ヲ示スノ句有リ。余モ亦之ニ和シテ答ウ。

夏四月、例ニ依リテ、官暇ヲ賜イ、国ニ帰ル。

延宝四年（一六七六） 二十二歳 又江城ニ朝ス。（中略）余、頃年伯棟ヲ以テ名トシ、江府青山ノ宅ヲ楓園ト曰イ、其堂ニ扁シテ尚綱ト称シ、頃日自ラ白雲主人ト号ス。

（原漢文）

『感往録』は、ここで終るが、「十五歳寛文九年」より「二十二歳延宝四年」までの八年間に記録されている文人達を、年次を追って見て

みると、

寛文九年 直條 十五歳

○梅嶺（肥前鹿島福源寺住 黄檗僧梅嶺道雪 二十九歳）

○中院亜相通茂（権大納言従二位 三十九歳）

寛文十二年 直條 十八歳

○松平忠房（肥前島原藩初代藩主 五十四歳）

○林学士（林鷺峰 林家第二代大学頭 五十五歳）

○整宇（林鳳岡 林家第三代大学頭 二十九歳）

○野節（人見竹洞 幕府儒官 三十六歳）

○狛高庸（鷺峰門生 南都楽人）

○藤勿斎（加藤明友 近江水口藩初代藩主 五十八歳）

寛文十三年 直條 十九歳

○野子苞（野間三竹 幕府儒医 六十六歳）

延宝三年 直條 二十一歳

○日野亜相弘資（前権大納言正二位 五十九歳）

○林櫨（鳳岡門生）

○和堅（鳳岡門生）

のごとく、梅嶺から和堅までの十二名の作者を見出すことができる。本詩箋巻に作品が収載されているのは、この内の梅嶺・整宇・野節・和堅の四名で、残り八名は収載されていない。しかし、この八名の中の林家の門人二名（狛高庸・林櫨）を除いたあとの六名は、当代文人世界の中の最高位に位置する人々であった。当代のトップに立つ文人達との交遊が、たかだか二十歳前後の青年において実現されていることに、ただただ驚きを禁じえないのである。

六名の中の、中院通茂と日野弘資の二人は、ともに後水尾院より古今伝授を受けた堂上歌人の代表である。日野弘資と直條との交わりは、『感往録』の記事のごとく、延宝三年より始まったのであるが、その交わりは深く、嫡子資茂をも含めた交流が、この父子が相い次いで亡くなる貞享四年秋まで濃密に続いたことが、直條宛の父子の書簡三十九通が残されていることによって知られる（拙稿「鹿島鍋島家旧蔵直條宛『日野亜相芳翰』——解題と翻字——『佐賀大國文』第四十一号平成二十四年十一月刊 参照）。また、批点歌も一千数百首が残されており、それらは、元禄四年頃、直條自身の手により『蒙山和歌集』『蒙山和歌拾遺』にまとめられていることが知られる。また、中院通茂が堂上歌人で最初に批点を施した歌道の師であったことが、この『感往録』で分かるわけであるが、中院通茂との師弟関係も、日野父子ほどの密度はないが、永く続いたことが、『蒙山和歌集』『同拾遺』に散見する通茂の批点歌で知られる。

次に、松平忠房と加藤明友の二名であるが、松平忠房は、林家に儒学を学ぶと共に、歌学者であり、伊勢神道家でもあった伊藤栄治を招き、広く和学に励んだ大名として著名であると同時に、和古書の収集に力を注いだ一大蔵書家としても有名であった。直條との関係から見ると、忠房の正室が直條の伯母であったこともあって、忠房は直條の文人としての才能を高く認め、伊藤栄治に歌道および伊勢神道の伝授をさせ、また、蔵書の貸借にも快く応じていたことが窺えるのである。いま一人の加藤明友は、林羅山に従って経書を修め、鷺峰・竹洞にも学び、孔子・顔子・曾子の木像を祀り、釈奠の儀を行い、自ら藩士に経史を講じた（『三百藩藩主人名事典』第三卷「加藤明友」、新人物往来社平成十一年刊）大名として広く知られ、また同時に、漢詩

文を愛好し、書道に造詣が深かったことでも著明な、当代切つての文人大名だったのである。

残る林鶯峰と野間三竹の二名であるが、鶯峰が直條に会ったのは、寛文十二年直條十八歳の折であったことは、『感往録』に記す通りである。延宝三年春には直條の求めに応じて「楓園賦并序」を述作し、翌年十月には、鶯峰と鳳岡、塾生狛高庸・和堅等を伴って、青山の楓園の紅葉見に招待され、「楓園十二詠」と応酬詩三首を詠じ、鳳岡の「序」と鶯峰の「跋」を添えて一巻として与えた。直條はこの一巻に『楓園雅集詩』の題を与えていたことがわかる（現在、祐徳博物館蔵）。鶯峰は「跋」の中で、「交情ハ地ノ遠近ニヨリテ隔テラレズ」と記し、二十二歳の青年直條に強い親近感を懷いていたことが窺える。直條にとつて、この詩文集一巻は至宝というべきものだったと考えられる。この時鶯峰は五十九歳であった。

いま一人の野間三竹と直條との出会いは、『感往録』の記述の通り、延宝元年春であったが、二人の交遊期間は、延宝四年秋に三竹が亡くなる迄の、わずか三年半という短いものであった。直條は、三竹の著作『逸士伝』等々を通して、その隱逸思想に共感するところ大であった。死没に際しては追悼詩六首を捧げ、また遺稿類を求めては、手元に置いていたことが知られる。直條と出会った時、三竹は六十六歳であった（拙稿「野間三竹と鍋島直條附翻刻『柳谷墓誌』——『楓園家塵』抜書（二）——『江戸時代文学誌』第三号、昭和五十八年刊）。

『感往録』に登場する著名な文人達六名を見てみたが、この六名の年齢は、平均で、直條より三十七歳も高く、当代に名をなした直條あこがれの大文人達であったということになる。勿論、こうした文人達の著作物や筆蹟類を直條が多く蒐集し、大切に収蔵保管していたこ

とは、現存する資料から明らかであるが、こうした大文人達の作品が、本詩箋巻に一切収載されていない点に本詩箋巻の特色があるといつて間違いない。つまり、そうした大文人達を除いた詩箋巻を作る点に、直條の目的があったとができるからである。以上のように直條の本詩箋巻作製の目的を押さえた上で、改めて本詩箋巻に載る十名の中で、『感往録』に登場している人物を見ると、梅嶺・鳳岡・竹洞・和堅の四名であることがわかる。和堅は鳳岡の門生ということで除外すると、あとの三名、梅嶺・鳳岡・竹洞が、直條にとつて、きわめて大きな意味を持った人物達であったことが知られる。この三名の年齢は、平均して直條より十三・四歳年上であった。先に見た六名の大文人達の平均年齢が三十七歳上であったことと比べてみると、両者には二十二・七歳の開きがあるわけで、この数値は、まさにこの三名が、大文人達の次世代に属することを示していたのである。今から文人を目差して出発しようとする直條にとつて、この三名は、いふなれば同世代の文人達であったといつてよいが、それと同時に、この三名は、直條にとつて、かけがえのない黄檗禅・漢文学・漢詩文の師であったことが注目されるのである。

本詩箋巻作製の目的を考える場合、まず考えておかねばならないことは、直條のこの三名との交遊が、江戸と鹿島に分かれていることである。いうまでもなく、鳳岡と竹洞との交遊は、江戸でのものであり、梅嶺との交わりは、鹿島であった。しかして、この江戸における交遊と、故郷鹿島の地におけるそれとの間には、儒学・禅学の違いを超えた隠微な問題、三歳年上の実兄格峰との互いの生き方をめぐる心の葛藤が、両者の作品より読みとれるからである。

鹿島福源寺の黄檗僧梅嶺道雪は、北条時宗の招請に応じて渡来した

無学祖元留錫の故地と伝えられた鹿島能古見の滴水庵跡に、円通山福源寺を重興し、寛文八年（一六六八）十二月十三日に入山し、寛文十年十月八日に、後事を桂巖明幢に托して退山し、黄檗山へ登る。従つて梅嶺が、鹿島に居たのは、寛文九年から退山するまでの一年十ヶ月の間であつたことになるが、この間直條は、兄格峰とともに福源寺に通い、学問と漢詩文と黄檗禪とを学んだのである。このことは、先に『感往録』に見た通りであるが、この間に、直條へ贈られたのが、本詩箋卷、作品②の詩偈二首である。この二首の題詞には「偈二首、嗣君右京大夫大檀越ノ敝刹ニ光賁セシニ謝シ奉リ、併セテ祝ス」とあり、詠作の日付は「己酉（寛文九年）孟冬初一」と記されている。これによれば、右京大夫（直條の幼名）が、正式に「嗣君」（父直朝を継いだ鹿島藩第四代藩主）となることが藩内で決定したことを知った梅嶺が、御祝いとして贈った詩偈であつたことが、第一首の第三句目

「昨夜報言ス、台旆（後継者の旗飾りの意）至ルト」より分かる。また、第二首の第三句目において、「入り得タリ 普門 真ノ境界」、「自ラ図成ル」と、黄檗禪における将来の大成を予祝していることも読みとれる。直條の「禪二帰スルノ志」（感往録）が、本物であることを梅嶺は認めていたのである。

おそらく、この偈に和したものと思われる直條の和歌四首が、『楓園和歌集』（『楓園家塵』巻六十五）にある。

梅嶺禪師の詩を和する歌

妙なれやもとのひかりを伝えきて世にあらわるゝ法のともし火
色もなくかもなき法のはな心いつも長なる人やしるらん

君をこそ海ともたのめのりの舟かゝるうき身を思ひはなつな

つたへおく法のことばやかればてじ鶴のはやしのかたみなるらん
梅嶺を黄檗禪の師と仰ぎ、深く仏道に参入しようとしている直條の姿がここにある。

いま、あえてここに直條の詠歌を掲げたのは、十五歳の時点において、直條はすでに中院通茂に批点を乞い、歌道に本格的に取り組んでいたことを知るためである。直條は、十二歳の折の詠歌を残しており、十三歳より十五歳までの自詠歌を『蒙山子少年詠』（『楓園家塵』巻八十五）としてまとめていた。『感往録』十五歳の条の年末に「自歌七首ヲ中院亜相通茂卿ニ呈シ」、卿より三首に批点を頂き、「以テ称美セラル」と誇らしげに記していたのも、直條が和歌の道に本格的に身を入れていたからであつた。

ということと、直條の十五歳という年は、鹿島藩第四代藩主となることが決定し、人生の方向が定められた年であつたと同時に、和歌・漢詩文・禪の道の修行に邁進する文人大名の出発点であつたことが確認できるのである。

この直條より三歳年上であつた格峰実外、実名直孝、幼名常陸は、寛文六年（一六六六）十五歳の折、父直朝の居館を出て、鹿島の浜に居宅を構え、同年冬、坊城大納言の娘を娶っている。おそらく、嫡子として父の後を継ぐ用意であつたと考えられる。それから三年後の寛文九年、十八歳の時、居宅を浜から現在の普明寺の久保山に移し、その後延宝四年（一六七六）二十五歳迄の四年間をこの地で過ごしたあと、古枝村に祐徳院を建て、移り住み、黄檗僧としての本格的な修行に入っている。この格峰の動静と、直條のそれとを比較してみると、直條は、格峰より二年遅く寛文十一年十七歳の折に、父直朝の居館を

出て、新宅を構え、同年七月蓮池藩主直澄の娘を娶っている。両者は、新宅に移り結婚するという同じ行動をとっているが、相違点は、直條が、その年の九月に、直朝に従って江戸へ出ていることである。

この違いは簡単に言えば、格峰は藩主とはならず、そのまま庶子として過ごし、直條が第四代藩主となったことを意味しているのであるが、何故こうなってしまったのかということを考えてみると、それは専ら格峰の側の問題であったと思われる。格峰は、浜の居宅を、三年後久保山に移しているが、これは『断橋和尚年譜』（現、普明寺蔵写本）の記述が、その地は、「今ノ普明ノ道場也」と匂わしているように、浜の市から遠い、禪の修行の地にふさわしい静かな山間の地であることを意味していたのである。こうした土地への移居を促したものは、前の年十七歳の寛文八年に、梅嶺との出会いがあったことが強く影響していたように思う。結局、格峰は、十五歳の寛文六年から十八歳の寛文九年までの三年の間に、直朝の後継者となることなく、十五歳の弟直條が直朝の後継者と決定されることとなり、格峰は、二十五歳までそのまま庶子として過ごすことになったのである。では、この嫡子の交代劇は、何故に起ったのかということを考えてみると、専ら、格峰が病弱の身であったことによると思われる。直條も幼少より度々大病にかかり、その都度病を乗り越えて来ていたのであるが、格峰の場合は、直條を凌ぐ程の病いがあったものと考えられよう。こうした病いの故に、格峰は、黄檗禪にあこがれ仏道へ身を投じたいとする思いが強くなっていたことが想像されるのである。このことを端的に物語っているのが、『断橋和尚年譜』の延宝元年二十二歳と同四

延宝元年二十二歳 始メヨリ推讓シテ別館ニ居ス。食土七百五十石、専ラ保養ヲ事トス。茲歳、浜祇園ノ奥ニ法泉菴ヲ創メテ造ル。桂老和尚来リ住ス。

傍線部Aにおいて、格峰は、十八歳寛文九年の久保山移居の始めより、藩主の座を直條に譲るつもりであったと記されており、傍線部Bにおいて、その原因を身の保養のためだと述べ、また傍線部Cにおいて、旧居である浜の地に、法泉菴を作り、梅嶺退山後、福源寺の初代住持となった桂巖明幢を住まわせ、黄檗禪の指導を乞うたと記されているからである。そして、それから三年を経た延宝四年二十五歳の折、ついに格峰は出家をとげるのであるが、このことを『断橋和尚年譜』は、次のごとくに記している。

延宝四年二十五歳 歳旦歌 降り初ル御法ノ雨ヨコノ春ニ願フ心
ノ花ヲ湿セ 茲歳、果シテ、世ヲ棄テ、妻ヲ遠ザケテ、徑ニ福
源ニ投ジテ、剃髮染衣シテ、桂翁和尚ヲ礼シテ師ト為シ、祐徳院
ヲ古江田村ニ、建テ、之二居ス。

格峰は、この年正月に傍線部Dの出家の決意の歌を詠み、傍線部Eのごとく、世を捨て妻を遠ざけて福源寺に身を投じ、桂巖和尚を師として出家を遂げ、傍線部Fに記されているとおり、現在の鹿島市古枝の祐徳院に居を移し、黄檗僧としての修行に励む身となったのである。そして、祐徳院の中に石壁亭を造り、自身の禅修行の場としたことが、延宝六年の近畿巡遊中、京都において月潭道徴に書いてもらった「石壁亭之記」によって知られる。おそらくこの頃から「石壁主

人」の別の号を用い始めたものと考えられる。

本詩箋巻に収載されている格峰の詩は、作品⑥の「直條公ノ関ヲ訪ルルノ韻ニ和ス」(七言律詩)、作品⑪の「楓園主人賢公ニ贈リテ正サンコトヲ求ム」(七言律詩)、作品⑫の〔無題〕(七言絶句)の三首である。作品⑥は、詠作の年次は記されていないが、格峰の動静と直條のそれとを対比させると、格峰が、詩題で「直條公」と呼んでいること、詩の内容から季節は秋で、二人は直接会っていると考えられること、そしてその場所は久保山の館であり、まだ、格峰が本格的な禪の修行に入っていない時の作であることが読みとれる。また、藩主となり世に身を乗り出した弟直條に会ってみると、何と禪への心は、以前よりも深くなっているようであった。ただ閑居して身を養い愁いに沈んでいるだけの自分とは、大変な違いだと心底自分を恥じていることが、この作品から読みとれるのである。格峰がこの年、旧居の地浜に法泉庵を造り、桂巖を招じ、黄檗禪に傾注していくことになるのも、おそらく、この直條との二年振りの再会があったからであったといつてよいように思う。ということで、作品⑥の一首は、延宝元年秋の詠作であったといえよう。

次に作品⑪であるが、この詩は第一・二句で「風ヲ同ジクシテ 相イ隔ツルコト三千里、君ハ東関ニ去リ 我ハ関ヲ掩ウ」とやはり直條と自分を対比させているが、第七句で「寂寞 深林 共ニ語ル無シ」と言っている通り、禪寂を求める二人の心は全く同じなのだと言っていることが読みとれる。黄檗禪を求める心において、格峰は直條と同等となったことを自ら述べているともいえるように思う。この一首の詠作年時は、あるいは、「石壁亭」建設中とも考えられる。第三句目に「力弱シ 閑中 彫刻ノ壁」といった語句が見えるからである。こ

のことに直條の帰郷のサイクルを考えあわせてみると、延宝六年秋と考えてよいように思う。

作品⑫の〔無題〕詩は、私と弟とは、黄檗僧と藩主という全く別の道を進んできたが、今も十年前も二人の心はやはり変わってはいない。そして仏道に専念している筈の自分は、実世間の中で仏心を忘れることのない弟に、却って恥ずかしさを禁じえないのであると、祐徳院の石壁亭において禪道に励む僧の立場から、実世間に居る直條を見ている格峰の視線が読みとれるように思う。

この三篇の詩に窺える格峰の黄檗僧としての心の成長の様子は、直條なくしては書き留めうるものではなかったといえよう。裏返せば、直條もまた、この兄格峰なくしては、禪心の深まりは期待できなかったといつてよいのかも知れない。本詩箋巻へのこの三篇の収載は、こうした二人の心の跡を記念するものとして選ばれたものだったのである。

この兄格峰に最も強く深い影響を与えたのが、寛文十一年末あるいは同十二年になって、福源寺の初代住持となり、延宝四年に普明寺の開山となった桂巖明幢だったのであるが、この桂巖の福源寺在住時代に、直條の詩に和したのが、作品⑫の五言律詩「藤伯棟居士侯ノ韻ニ和シ奉ル」であった。署名に「福源桂巖」とあるところより、寛文十一・二年から延宝四年迄の間の作品であることはいままでもないが、詠作の年時は、江戸へ出て文人大名としての「名声」を得て帰国した直條が、福源寺を訪ねて来た折の唱和の詩と考えられる。先に見た直條の動静より、延宝元年の初度、あるいは二度目の延宝三年と見て間違いないのであるが、どちらかに決定することは現在のところ困難である。だが、桂巖の直條を見る眼が、当然のことながら、格峰との対

比の上であつたことを考えてみると、冒頭第一句中の「豪傑ノ士」という直條評は、江戸表における若き文人大名としての直條の輝かしい活躍を意味するものだったといえよう。愁いに沈むことの多かった格峰との対比において、堂々と文事につとめ、禪に励む直條の姿は、まさに豪傑と呼ぶにふさわしかったからである。いま、作品⑫の詠作年次を決定することは困難であると述べたが、桂巖に、兄弟それぞれの人となりを認識するための時間が必要であつたことを考慮するとすれば、詠作年時は延宝三年とする方がより適切であるように思われる。

郷国鹿島の地には、いま一人、直條を尋ねてくれる七絃琴の師何心声がいた。本詩箋巻には、

②「詠桜花于一壺庵」(七言絶句)

⑤「類蒙恩召、感激無涯。但園莽禿生、未敢趨扣菴門。茲承賜詠落花瓊章、寒窓当一夜増光、春而將帰、疑復陽春。頓首頂吟、頂吟

頓首、謹慕高韻、賤意陳律、呈上政」(七言律詩)

⑨「元旦」(七言絶句)

⑬「感近左右、奉和即席尊韻、上呈」(七言律詩)

⑭「一个禿民、幸治恩厚之深、感銘五内、帰郷生色、奉和尊韻、慰呈」(七言律詩)

の五首が収載されている。作品⑨「元旦」の序に「年二逢ウコト四十三」とあつて、この詩は、心声四十三歳の時の作であることがわかる。何心声は、何高材の長男で、俗名は仁右衛門、字は可遠、諱は兆晋、寛永四年(一六二七)生まれで、貞享三年(一六八六)三月五日に六十歳で没した(宮田安『唐通事家系論攷』第十七章「何毓楚を祖

とする何氏家系」、長崎文献社、昭和五十四年十二月刊、若木太一「高玄岱自筆卷子本『心田菴記』について」、長崎歴史文化博物館『研究紀要』第七号、平成二十五年三月刊 参照)。直條より二十八歳年長であつた心声は、作品⑨の末句で「桐老(桐の古木で作られる七絃琴のこと)鳴リテ 禿老歌ウ」と詠んでいる通り、直條に七絃琴を教授した人物であつた。心声は長崎樺島町の広大な屋敷に住み、度々幕府の役人一行を宿泊させるとともに、万治元年(一六五八)から寛文八年九月二十八日、「御暇御免」となるまでの十年間、唐通事(小通事)を務めた。唐通事を辞した後は、唐土山の麓(現在の西山町の東片淵二丁目)に心田菴を営み、七絃琴をかなで、隠逸を楽しんだといわれる。直條がこうした心声を、七絃琴の師とすることができたのは恐らく、寛文八年八月、長崎に戻つた即非に侍していた梅嶺の紹介があつてのことではなかつたかと思われる。即非に侍して長崎に來た梅嶺は、同年十二月十三日には鹿島福源寺の住僧となつていたからである。作品⑨の寛文九年元旦詩の背景に、梅嶺が居たことが考えられるが、作品②・⑤の二首については、江戸へ出る前の直條に贈られたものだったのでないかと思われる。しかし、作品②の詩題の「一壺庵」、また詩中の「山東」についてはいま一つよく分からない。また、この作品②・⑤・⑨の応酬の間に二人が会つていたかどうかは確めることはできないようである。ところが、残る作品⑬・⑭の二首について見てみると、作品⑬の場合は、「幸イニ召シ有ルニ逢イ 親シク蟠座(胡座)ス」とあり、また「春 共ニ帰ルヲ告ゲ 帆一片」「月明ルクシテ 待ツガ若シ 渡江ノ間」とあることより、直接会つてゐることが確められ、しかも、春になつて互いに別れたと詠じていることより、直條は江戸へ、心声は鹿島から諫早江津へ渡つて(江は諫早

江の「江」か）長崎へ戻ったと考えられる。作品⑦には、「坐シテ対ス」という辞句があり、「此レヨリ忘レ難シ 流水ノ曲、琴童睡ル莫カレ 秋声ヲ聴カン」と詠じており、七絃琴が深く両者を結びつけていることが読みとれる。延宝元年以降同七年の間の直條帰国時の作であったと見て間違いないように思う。

なお、作品⑦の假我堂人については、鹿島近在の人物であったか、心声に近い長崎住の人物であったか、はたまた江戸の林家周縁の人であったか、わからない。後考を期すことにしたい。

最後に、江戸の二人、林整宇と、幕府の儒員人見竹洞と直條の交遊について見ておくことにする。

林整宇、諱は戀、信篤、字、直民は、鷲峰の次男として正保元年（二六四四）十二月に生まれる。幼名、又四郎。鳳岡・整宇と号した。寛文四年將軍家綱にお目見得し、幕府の編纂事業を兄梅洞と共に助ける。寛文六年九月兄が没したために、同年十二月切米三百俵を給され、常春と改名し、延宝八年（二六八〇）家督を相続する。林家を相続する立場にあった整宇は、直條と出会った寛文十二年（一六七二）には二十九歳で、直條よりは十一歳の年長であった。学問、また、漢詩文を修めることを強く願っていた直條にとって、この林家を継ぐ整宇との交遊には、特別に期待するものがあつたと考えられる。最高の指導者を得て、息永く教授を受けたいという願いである。こうした思いから直條は、整宇の詩を、巻頭と巻軸に配置したのだと考えられる。この直條の願いはかなえられ、直條が没するまで、整宇は、直條の漢詩文の師として、批点・添削の労をおしなかつたのである。この二人の長年にわたる親交を象徴するものが、一千四百文字に達する追悼文「正統院泰窩備前守藤大夫碑誌銘」（『鳳岡全集』巻百十七）で

ある。その中で、整宇は、直條を「善人」だと称えていた。「善人」とは、聖人・君子に次ぐ、美しい純粹な人間の資質に富み、恒に持するところがあつて、泰然としてゐる人物をいう。整宇は『論語』述而第七の「善人吾不得而見之矣」（善人ハ吾得テ之ヲ見ズ）の引用に続けて「噫、善人之称難矣」（噫、善人ノ称ハ、難シ）と歎じた後に、「夫独加於大夫無愧焉」（ソレ独リ大夫ニ加エテ愧ズルコト無シ）と直條を称讃し、さらに「九原如可作、我其與帰坎」（九原如シ作ス可クンバ、我レ其レ与ニ帰センカ）、つまり、もし黄泉の国があつたとしたら、私は直條と同じようにそこに行きたい、とまで直條との友情の深さを述べていたのである。寛文十二年の二人の出会いの意味が、いかに大きいものであつたかは、今更説明するまでもないが、直條の側から言えば、十八歳の青年の眼力が、生涯最大の学友となる整宇の人間性を見抜いていたといえるわけであり、巻頭に整宇の詩を置いた意味も理解できるのである。

いま一人の竹洞は、林羅山門で、人見氏。本名、節。一名宣卿。通称又七郎・友之。別号、竹洞・葛民・逸民・葛の翁。寛文元年將軍家綱の近侍として出仕、のち学士にあげられ、林家の人々とともに幕府の編纂事業に携わる。延宝元年（一六七三）父玄徳の家督七百石を継ぐ。直條と出会った寛文十二年、竹洞は三十六歳、直條より十八歳の年長であつた。しかし本詩箋巻に収載されている竹洞の作品に、こうした年齢差を配慮し、手加減を加えたかと思われるような言辞・表現といったものは一切感じられず、全く対等な立場から応酬がなされていることに驚きを禁じえないのである。こうした竹洞の態度は、あるいは事前に、松平忠房あたりからの情報があつて、直條の漢詩文創作の実力、和歌詠作の心得、さらには七絃琴に心を寄せる、熱心な文人

志望の青年であることを承知しており、また、直條が文人志望にふさわしい人間性を確かに備えていることを認め得たからだといつてよいであろう。こうした認識があつてはじめて、竹洞は作品③の和詩と書翰文、あるいは作品⑨の和文のごとき、滑稽味に満ちた何ら取り繕うことのない、自由奔放な表現でもつて、自分の姿を直條に晒すことができたのだといつて間違いないように思う。この竹洞の姿、態度は、若き直條が理想とする完成された文人の在り様と見えたのではあるまいか。直條は、この十八歳年長の竹洞を、学問・漢詩文の師とするとともに、文人の先達として慕い、竹洞が没するまで、その親交は続けられたのであるが、その中で、直條は、自分の生涯の漢詩文紀行作品のほぼ全てに、批点、添削を受けていた。貞享三年（一六八六）、直條三十二歳の折の紀行作品『蓬窓隨筆』は、同年の閏三月十九日より二十七日までを叙した漢文日記体の作品である（『楓園家塵』百六十五所収。なお、拙稿『鍋島直條の紀行及び日記―『楓園家塵』抜書（六）―、『江戸時代文学誌』第四・五、昭和五十・五十二年刊を参照されたい）が、この作品に批点を加えた竹洞は、巻末に七言律詩一首を添え、直條が訴える参勤交代の苦しみを慰めんがため、この詩の第一・二句で、

歳々の来還 君愁うこと莫かれ
循環の天理 遂に何をか留めん

と詠じては直條を慰め、年々の生の苦しみに対して、天理の循環だと解釈することで、その苦しみを乗り越えよ、という竹洞の言である。これこそ全き信頼感の中で取りかわされた対話だといふことができ

る。この信頼感は、十八歳の直條が竹洞との出会いの時に直感したものにほかならなかったといふことができるように思う。

以上、本詩箋巻作製時における直條の編集の意図を探ってみたのであるが、一言でいえば、本詩箋巻は、文人への強い志向を持った十五歳から二十五歳までの間に出会った師友との出会いを記念するために編まれたものだったといふことができる。そして、そのために超有名人は収載せず、比較的年齢の近い江戸の林整宇と人見竹洞の二人、また、鹿島の地においては、兄格峰と黄檗僧二人、それに長崎の唐通事を選ばれていることを考えてみると、この十年間に、直條の文事を、手にとって指導した人々から贈られた記念すべき作品を集めたものだったということが納得できるように思う。

以下に簡略な書誌を記し、料紙、特に詩箋についてのデータの一覧を掲げる。

卷子 縦二九・〇糎、横七三四・〇糎。

巻軸 木材

表紙 縦二九・〇糎、横二三・八糎。灰緑色、墨流し模様。題簽の

右側に、直條自筆で「巻頭正月十四日雪」と墨書。

題簽 左肩、高さ十二・〇糎、幅一・七糎。朱色台紙の上に白色紙を重ね、直條自筆で「詩文」と墨書。

見返し なし。見返し部分より料紙第一枚目の鳳岡詩箋を貼る。仮り表装。

料紙一覧

一、	詩箋（浮碧玄圃斎製）	青みの灰緑色刷	四周単辺	22.0	×	29.7
二、	詩箋（竹嘉斎）	多色刷	樹下白象（白象 空摺）	14.6	×	26.9
三、	楮紙			15.1	×	67.3
四、	鳥の子紙			24.8	×	15.0
五、	詩箋（藤光室）	多色刷	蓮と鶴 こうのとり （鶴 空摺）	19.4	×	31.1
六、	鳥の子紙			20.0	×	31.4
七、	楮紙			20.2	×	30.8
八、	詩箋	多色刷	岩に花卉	19.9	×	33.1
九、	詩箋（浣花斎珍藏）	黄檗色刷	草虫花卉文縁	22.2	×	46.1
十、	詩箋	黄檗色刷	花卉	23.8	×	11.0
十一、	詩箋（麥光室）	多色刷	銀杏 いちょう に小鳥	23.8	×	44.3
十二、	詩箋	黄檗色刷	花卉	23.8	×	11.0
十三、	詩箋	黄檗色刷	花卉	23.8	×	11.0
十四、	鳥の子紙			23.6	×	44.7
十五、	詩箋	黄檗色刷	花卉	23.8	×	11.0
十六、	詩箋（浣花斎珍藏）	多色刷	草虫花卉	23.3	×	45.5
十七、	詩箋（浣花斎珍藏）	多色刷	草虫花卉	23.3	×	45.5
十八、	詩箋（宝像玄圃斎製）	灰青色刷	花と卷雲模様金具文縁	21.4	×	29.6
十九、	楮紙			21.4	×	58.0
二十、	詩箋（十竹斎珍藏）	青丹色刷	古松文縁	21.4	×	27.6
二十一、	鳥の子紙			19.4	×	23.2
二十二、	鳥の子紙			11.0	×	23.6
二十三、	詩箋（浮碧玄圃斎製）	青みの灰緑色刷	四周単辺	22.0	×	29.7

著者紹介

中尾友香梨（なかお・ゆかり）

現職 佐賀大学文化教育学部准教授

主要なる論著 『江戸文人と明清楽』（汲古書院、2010年）、『歴史に埋もれた名医―徳永雨卿』（翻刻・注釈資料、佐賀大学地域学歴史文化研究センター発行、2011年）、「江戸中期の名医―徳永雨卿」（論文、佐賀大学・佐賀学創成プロジェクト『佐賀学』、花乱社、2011年）、「日本における明楽の受容」（論文、『「礼楽」文化―東アジアの教養―』、ベリカン社、2013年）、「明清楽の伝来と流行」（論文、『長崎・東西文化交流史の舞台―明・清時代の長崎―』、勉誠出版、2013年）、「文人大名―鍋島直條」（論文、佐賀大学・地域学創成プロジェクト『佐賀学Ⅱ』、岩田書院、2014年）など。

井上敏幸（いのうえ・としゆき）

現職 佐賀大学地域学歴史文化研究センター特命教授・佐賀大学名誉教授

主要なる関連論著 「西国大名の文事」（『日本の近世』第12巻、中央公論社、1993年）、『桑弧』第1～4冊（共著、古典文庫、2001年）、「『楓園家塵』抜書（一）―連歌師時春・昌坪父子 附翻刻『時春聴書』」（『江戸時代文学誌』第2号、1981年）、「野間三竹と鍋島直條―『楓園家塵』抜書（二）附翻刻『柳谷墓誌』」（『江戸時代文学誌』第3号、1983年）、「『鹿島小誌』解題と翻刻―『楓園家塵』抜書（三）」（『文芸と思想』第47号、1983年）、「鍋島直條と寂源僧正―『楓園家塵』抜書（四）」（『文芸と思想』第48号、1984年）、「鍋島直條の紀行及び日記―『楓園家塵』抜書（五）～（六）」（『江戸時代文学誌』第4～6号、1985～1989年）、「『老のくりごと』：解題と翻刻」（『佐賀大国文』第28号、1999年）、「『野べの若草』（上）：解題と翻刻」（『佐賀大国文』第29号、2000年）、「『野べの若草』（下）：解題と翻刻」（『佐賀大国文』第31号、2003年）、「『浮海藻』：解題と翻字」（『佐賀大国文』第34号、2005年）、「鹿島鍋島家旧蔵直條宛『日野亜相芳翰』」（『佐賀大国文』第41号、2012年）など多数。

文人大名鍋島直條の詩箋巻

平成二十六年（二〇一四）三月三十一日

著者 中尾友香梨・井上敏幸

発行 佐賀大学地域学歴史文化研究センター

〒八四〇―八五〇―一 佐賀市本庄一番地
電話 〇九五二―二八―八三七八

印刷 大同印刷株式会社

〒八四九―〇九〇―二
佐賀市久保泉町大字上和泉一八四八―二〇
電話 〇九五二―七一一―八五二〇（代）

